第４回　ライフスタイルの多様化と関係人口に関する懇談会

令和２年１１月１０日（火）

【田中課長補佐】　　それでは、定刻１分前でございますけれども、全員そろいましたので、ただいまから、ライフスタイルの多様化と関係人口に関する懇談会の第４回会議を開催いたします。

私は、事務局を務めております国土政策局総合計画課の田中と申します。本日は、お忙しい中、御出席いただきまして誠にありがとうございます。事務の関係でお伝えすることがございますので、その間はしばらく私のほうで司会を務めさせていただきます。カメラ撮りが必要な方々におかれましては、この時間にお願いいたします。

会議の冒頭につき、本日の会議の公開につきまして申し述べさせていただきます。本会議は公開いたしますが、新型コロナウイルスの感染防止の観点から、マスコミ関係者のみに傍聴していただいております。議事録につきましては、後日ホームページ上で公表させていただきます。この点につきまして、あらかじめ御了承いただきますようお願い申し上げます。

本日、石山委員につきましてはオンラインでの参加となっております。

それでは、カメラ撮影はここまでとさせていただきます。今後の撮影は御遠慮いただきますようお願い申し上げます。

事務局から議事に入る前の説明等につきましては、以上でございます。これ以降の議事運営は座長にお願いしたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

【小田切座長】　　承知いたしました。改めまして、皆様方どうぞよろしくお願いいたします。

この研究会も第４回目となりました。前回も申し上げたんですが、こういった研究会にしては珍しく、３回目と４回目がセットという、そういう構成を取っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、前回のレビューといいましょうか、その話をしていただきたいと思いますが、ここでは、実は前回のレビューに当たって、住み続けられる国土専門委員会、これは国土審議会の下部組織ですが、そこで検討した１つの方向性について、少しアップデートといいましょうか、そんなこともチャレンジしていただいております。前回の議論の振り返り

に加えて、そんな議論も小田桐国土政策企画官から御説明をお願いいたします。

【小田桐企画官】　　それでは、私のほうから、資料に沿って御説明をさせていただきます。

まず、資料の１ページ目でございます。前回の懇談会の議論のレビューの中で１点、関係人口と県人会・同窓会ということで、岡本委員から新しい県人会について御紹介をいただきましたので、関係人口と県人会・同窓会の比較表の中に、新しい県人会ということで追記をさせていただいております。関係人口と県人会と比べてみていただければと思いますけれども、地域を応援したいという共通の価値観があるとか、自主的な意思が多数というようなところが特徴かなと思っておりまして、関係人口と県人会の右上の概念図の中で、ちょうどクロスする辺りに該当する位置づけになるのかなというふうに考えております。前回の議論を踏まえて追記をさせていただきました。

２ページ目は、前回の懇談会の委員の主な意見ということで、大きく３つに分けて整理をさせていただいております。

まず１つ目が、関係人口から移住につながることはモチベーションになるということで、関係人口が移住することは地域側のモチベーション向上につながるという、重要な観点であるという御指摘ですとか、地域側がマンネリ化しないという御意見がございました。また、行政機関が、関係人口リテラシーのようなものですとか関係人口の多様性などについて普及させることが必要ではないかという御意見をいただいております。

２点目が行政機関の役割ということで、ここはいろいろ御意見をいただきましたけれども、まず行政としても、自分たちがキーパーソンやプレーヤーになることができると、そういう認識を持つ必要があるのではないかという御意見をいただきました。また、行政職員同士のネットワークの形成が重要という御指摘ですとか、自治体と地域おこし協力隊との分業、役割分担を適切に行うことが必要であるという御意見をいただいております。また、行政側が関係人口の取組に関与することで地域の人へ安心感を与えることになるということで、ある種の保証になるのではないかという御意見もいただいております。

また３点目に、その他の意見といたしまして、特に関係案内人の信頼の物差しを整理することが必要ではないかというような御意見などをいただいております。

めくっていただきまして、先ほど小田切先生から御紹介ありましたプロセスデザインについて御説明をさせていただきます。４ページ目でございますけれども、こちらは住み続けられる国土専門委員会において整理されました地域のプロセスデザインということで、

従来のものをケース１、地域ビジョン先行型という形で御紹介させていただきます。地域があらかじめ策定したビジョンに基づいて、関係人口を誘引して、地域住民と関係人口が連携・協働して地域づくりを実施していくという、そのプロセスを概念図化したものでございます。こちらはあらかじめ地域側がビジョンをつくるというところがポイントかなというふうに考えております。

めくっていただきまして、今回新しくお示しをさせていただきますのが５ページ目の関係人口誘引先行型ということでございまして、これまでの関係人口の議論の中でも、関係人口の方が地域にいらっしゃることで、ある種、触発されると。６ページ目にもございますけれども、関係人口の方が直接何かをするということでなくても、地域の側が触発されて、結果地域づくりの活動が進んでいくということもあるのではないかという切り口もあるかと考えまして、４ページ目とは違うプロセスということで、５ページ目、まず一部の有志が中間支援組織等と連携して関係人口を地域に誘引し、地域の方と関係人口の方が交わる中で、こちらですとステップの３になりますけれども、ここでそのビジョンを策定して活動の実践・継続に行くと、そういう順序もあるのではないかということで概念を整理させていただきました。こらちにつきましても御議論いただければというふうに思っております。

６ページ目が、今申し上げましたように、地域住民と関係人口の関わりによって触発されて、主体的に参画する方だけでなく、例えば関係人口であれば趣味活動や消費活動などで関わりを持たれた方、また、地域住民の中でも全ての方が積極的に地域づくりに参加しているわけではないんですけれども、そういった方々にとっても、ある種触発されて活動に参画していくような、そういうプロセスもあるのではないかということを、ここで再掲という形で載せさせていただいております。

また、７ページ目以降は参考でございますけれども、居住地における地域活動への参加状況というアンケート調査結果の一部でございますけれども、コロナ禍発生前の居住地における地域活動への参加状況というものを見ますと、３大都市圏にいたしましても、その他の地域にいたしましても、それほど積極的に参加したことはないという方がやはり多数でございまして、他方で、８ページ目になりますけれども、居住地における地域活動への参加状況の中で、一番上の濃い色のところが直接寄与型になりますけれども、直接寄与型の方はやはり地元に関わっていらっしゃる割合が相対的に高く、こういった方々の姿を見ることが１つ触発になるのではないかというふうなこともちょっと考えおり、参考という

ことで掲げさせていただきました。

あと、３６ページになりますけれども、関係人口を迎えるに当たっての地域の対応ということで論点を整理させていただいておりましたけれども、前回の議論を踏まえまして、こちらの赤字の部分が追記させていただいたところになります。基本的には皆様から御意見いただいたものを整理したものでございますけれども、前回の議論を踏まえて若干加筆させていただきましたので、御報告をさせていただきます。

４０ページになりますけれども、１点だけ、先ほど申し上げました行政の役割のところでございますが、こちらは前回のものを再度整理させていただきました。まず総論と各論という形で分けさせていただきまして、総論では、地域、関係案内人、中間支援組織等が行いたいことについて既存の施策が活用できるように支援するということで、各論で大きく２点、関係案内人や中間支援組織が活動できる環境の整備ということと、地域側が活動できる環境の整備ということで、２点に分けて整理をさせていただきました。

まず１点目のほうでございますけれども、関係案内人や中間支援組織の立ち上げを支援するということが１つ役割としてあるのではないかということで、初期費用の支出ですとか事業計画の策定等の支援ということが例として考えられるかと思います。２点目に、関係案内人、関係案内所や中間支援組織の信頼性を担保するということで、先ほどのある種の保証ということでございまして、取組に関する地域の住民の理解を得るために行政がバックアップをするという役割があるのではないか。３点目に取組の継続性を確保ということで、経済的な自立の確保という観点も含めて、例えば民間の事業者から継続的な支援が得られるようになどといった、行政が中間支援組織等と民間事業者とのつながりを創出するという、そういう役割があるのではないかということで整理をさせていただきました。

２点目の、地域側が活動できる環境の整備ですけれども、こちらは４項目あります。まず１点目が、地域おこし協力隊や集落支援員等との連携・協働、それによる地域とのネットワークの形成で、２点目が、関係人口と地域住民が行っている取組を地域に向けて情報発信するということで、こちらも先ほどの信頼の醸成という部分と重なるかと思いますけれども、信頼性が高い自治体の広報誌等を用いて関係人口に関する理解を醸成していくという役割。３点目が、地域側で地域維持活動や地域づくりを行っている人の経済的安定を確保ということで、やはり活動に見合った対価が得られるような支援を実施するという役割があるのかなというふうに考えております。最後に４点目になりますけれども、地域間で連携できるよう、地域づくりのキーパーソン、プレーヤー等のネットワーク形成を後押

しということで、行政がハブとなって、同じ感覚や課題を持つ地域づくりのキーパーソン、あるいはプレーヤーが集まって、悩みや解決策を交換することができる場ですとか仕組みを構築する、設けるということも行政の役割ではないかということで整理をさせていただきました。

前回の議論を含めまして、資料の修正も含めて御紹介をさせていただきました。

以上でございます。

【小田切座長】　小田桐企画官、どうもありがとうございました。第１番目の議題として、前回のレビューをさせていただいております。その中で、先ほども申し上げたように、２年前まで行っていた会議で議論した内容のある種のアップデートといいましょうか、それまでも御提起いただきました。特にレビューのところ、いかがでしょうか。皆様方の意見の位置づけがこれでいいのかどうか。

余計なことを一言申し上げますと、実はこの関係人口という概念、得田参事官に内閣府で機会をいただいたときに、参加型の概念だということを申し上げました。いろいろな方々が参加しながらその中身をつくっていくという、別の言葉で言うと、ある種のオープンイノベーションといいましょうか、そういう概念だろうと思います。そういう意味で、これは指出さんが概念をつくったときに、大変失礼な言い方をしますが、ふわっとした概念設定をしたことによって、その中身をいろんな形でつくっている段階だと。そういう段階で、いろんな議論が入ってきました。今回のレビューもまさにそうだというふうに思いますので、ぜひそれぞれチェックをお願いします。

いかがでしょうか、何かありますでしょうか。まさに参加型ですので、積極的にお願いいたします。

石山委員、聞こえておりますか。２ページに関係案内人の信頼の物差しを整理することが重要だという、大変重要な御提起をいただきました。ここの場所で、こういう内容でよろしいでしょうか。――はい。ありがとうございました。

いかがでしょうか。あるいはプロセスデザインのところもチェックしていただければと思います。もしなければ、事務局から……。

石山委員、お願いいたします。

【石山委員】　４０ページの行政の役割というところで、オンライン関係人口であったりとか、あとはオンラインの活用というものが結構重要であるという話が議論の中である中で、それが結構地域差になっているような印象も受けております。そういう中で、この

行政の役割に、例えば地域づくりであったりとか中間支援組織等に対して、オンラインのサポートや支援といいますか、そういった部分も可能性があるのかなというふうに思いました。ちょっと実態が分からないので、ぜひ鳥取県さん等に聞いてみたいんですけれども、いかがでしょうか。

【小田切座長】　　これは岡本委員にお願いしてよろしいですか。お願いいたします。

【岡本委員】　　鳥取県の事例ではなくて、実は先日、和歌山の田辺市の龍神地区ですか、旧龍神村に今度Ｕターンされようという方が、Ｕターンする前に関係人口をつくっていこうということで、オンラインで最初にイベントをされたんです。そのときに龍神村から参加された方から全く同じような話がありまして、やっぱり地域の人にオンラインというんですけど、使ってみると便利なことというのに気づいてもらえるんですが、やっぱり一番最初にオンラインを使ってみるというところがどうしても、ちょっとステップが高いんだというお話は伺います。ただ、一度使ってみられると、非常に便利で、しかも離れていたところで、特に高齢者の方とかはこれを使うことで、例えば鳥取県のもちがせ週末住人とかですと、離れて遠くに行ってしまった大学生、就職して東京に出てしまった大学生と再び会えるということもありますので、こういったＤＸというか、そういうものの普及というのは１つ、広げていくときには有力なことになるかとは思います。

【小田切座長】　　岡本委員、ありがとうございました。

　中島委員、お願いいたします。

【中島委員】　　やはり今のリテラシーの観点というのは非常に重要だなというふうに思うと同時に、ちょっと私ごとなんですけれども、石山さんは御存じですけど、最近２拠点居住を始めまして、今日も熱海から来ているんですけど、通信環境がやはり地域によって非常に差があります。たまたま住んだお家が通信環境がすごくよければ、すごく快適にコミュニケーションできますし、そうでない場合は一苦労するというところで、そういう一般の移住される方だけではなかなか手が届かないような、そういった環境の整備というところも、やはりこのオンラインとオフラインをうまく組み合わせてやっていく場合には非常に重要ですし、こここそやはり行政だったり国にしっかりサポートいただくことのインフラの重要性というところがあるかなと体感しているところです。

【小田切座長】　　ありがとうございました。大変重要な提起だと思います。ほかにはいかがでしょう。

　どうぞ。

【中島委員】　　あともう一つ、すみません。追加で、４０ページの各論１の２の関係案内人や中間支援組織の信頼性担保、取組に関する地域住民の理解を得るために行政がバックアップというところがあるんですけれども、ここは地域住民の理解だけでなく、関係案内人として、都市部の方々に対する理解というか、信頼という部分も非常に、この行政の方々がバックアップされるということはいい事例かなと、大事なことだなというふうに思っております。SMOUTというサービスを我々やっておりますけれども、最近よくあるいいパターンが、地域の自治体の方がSMOUTの窓口になって都市部の方とやり取りされるケースもあるんですけれども、民間企業の方だったり地域の企業の方が窓口になって都市部の方とやり取りをされるケースも最近増えてきております。そのときに、とはいえやはり一般の地域の方ですので、どれだけその地域のことに信頼を持って、信頼の置ける方なのかということがやはり分からないんですけれども、そのときに、その後ろに自治体の移住の担当者の方だったり、関係人口の担当の方が後ろに控えていらっしゃって、時折登場されるというようなことをやられている場合は、非常に信頼されるというか、相互の連携が進むというところがありますので、そういう意味でも、域外の人にとっても、この行政のバックアップ、信頼性の担保というのは重要だなというふうに感じています。

【小田切座長】　　これは多田さんに聞いてよろしいでしょうか。今、中島さんから御指摘いただいた行政の、そういった意味での役割、これについて何か一言あれば。

【多田委員】　　そうですね、行政というとやはり公的なものですから、普通に、何も知らない、どこの人か分からない人よりは、何というか、印籠みたいな感じで、そういう効果があるんじゃないかなと思います。あと、行政がオンラインを支援するといったとき、インフラは行政がやって、そのリテラシーを向上させるというのは多分、行政の人の中でもそんな、たまに個人的な詳しい人がいるかもしれませんけど、一般的に言うと外から来た人のほうが詳しい人が多い傾向がありますので、そういう関係人口とかによく触れているような人が地域の人に普及させるのを後押しするというのがイメージとしては合うのかなと思います。

【小田切座長】　　そういったコラボレーションが重要だということだと思います。ほかにいかがでしょうか。

　じゃあ岡本室長、お願いします。

【岡本委員】　　前回の委員会の後にいろいろと、多田委員、指出委員とお話ししたときに出てきた話ですが、４０ページの１の（３）の取組の継続性を確保というところに関係

してなんですけれども、いわゆる中間支援団体の方は大体トップが引っ張っていくパターンが多いんですが、その下にいて実務を担っていて、次の担い手となられる方、そういった方の人材育成が必要ではないかと。その方が抜けてしまうと、あっという間に活動費稼げなくなってしまいますから、例えば活動に出ていられる間の人件費等の支援があったらいいのではないかという話と、あと、やはり地方の方だけで活動してしまいますと、いわゆる都市部のほうの視点が入らなくなってしまいます。そういう意味で、例えば都市部の人材とかが複業で入るとかというようなことを支援するような仕組みというのがあるとよいのではないかという話をしておりました。

【小田切座長】　ありがとうございました。具体的に中間支援組織の在り方についてお話をいただきました。ほかにいかがでしょうか。特に今見ている４０ページについては、前回、谷口先生からわくわく感がないという、そういう御指摘を受けて事務局が作り替えたものですので、ここは後で、場合によったらもう一度振り返るということにさせていただきたいと思います。

それでは、佐藤総括補佐、お願いいたします。

【農林水産省】　農水省の佐藤です。プロセスデザインの４ページ、５ページのところで、大事だなと思った論点なので１点確認しておきたいんですが、地域活動に参画する市民というのが低いところからだんだん上っていくところの図が４ページと５ページは同じになっているんですけど、５ページのほうは一部の有志が中間支援組織等と連携し関係人口を地域に誘引となっていて、一部の有志による取組というところが強調されているのかなと思ったんですけど、４ページのステップ１の地域ビジョンの策定、課題の特定という部分は、地域活動への関心・関与が低い市民にも少し関与してもらいながら進めていくということが想定されているのか、また、その関わり度合いにもいろんなグラデーションがあることを想定しているのか、その考えをお聞きできればと思いました。

【小田切座長】　いかがでしょうか、４ページ、５ページの黄色の形、これでいいのかという。これは田中補佐、お願いいたします。

【田中課長補佐】　４ページ目のプロセスデザインにつきましては、これは「住み続けられる国土専門委員会」の中で議論した結果を掲載している状況でございまして、少数の地域活動に参加する市民がいろいろと地域のことを考えて、課題を特定してビジョンをつくっていくというイメージのように私は考えております。

【農林水産省】　ありがとうございます。

【小田切座長】　　流れから言うと、今おっしゃっていただいたように４ページが先にあって、そしてもう一つのパターンとして、つまり我々が、関係人口が誘導するという、そういうパターンを入れる必要があるということでこの５ページを作った。場合によったら、そのときにこの黄色の形は少し変える必要があるかもしれませんね。そこも含めて少し御検討いただければと思います。

谷口先生、お願いいたします。

【谷口委員】　　５ページの図を新たに作っていただきましてありがとうございます。ただ、今回初めて見たときに、４ページと５ページを行ったり来たりしながら、どこが違うんだろうと。何か間違い探しみたいな感じでしていて、１個明確な違いは、地域ビジョンがどこで出てくるかなんですよね。４ページは地域ビジョンが最初にありますよと、これに従ってやってくださいという感じで、５ページのほうは地域ビジョンをつくり上げていきましょうということなので、ここの違いは結構大きいと思うんですけど、その違いが、ちょっと一生懸命見ないと見えないので、そこをもうちょっと強調していただくような図にしていただけるとありがたいなと思いました。

以上です。

【田中課長補佐】　　了解いたしました。まさに谷口先生におっしゃっていただいているとおりで、地域の課題の特定とビジョンを策定する段階が違うところが４ページ目と５ページ目の大きな差分になっておりまして、５ページ目の大きな特徴は、ビジョンを明確にする前に関係人口が増えていき、地域活動に参加する市民が増えていくことが大きな特徴となっておりまして、それらの差異が明確になるように、間違い探しのようにならないように工夫したいと思います。

【小田切座長】　　ぜひお願いしたいと思います。プロダクティブな意見ありがとうございました。よろしいでしょうか。

ここの部分は関係人口と地域の内発的発展の好循環といいましょうか、相互刺激といいましょうか相互交渉といいましょうか、そういったことの重要性を、特に自治体の方々にしっかりと分かっていただく必要があるということで位置づけておりますので、意外と重要なところだと思いますので、ぜひ精査をお願いいたします。

それでは、取りあえず先に進めさせていただきたいと思います。先ほど申し上げたように、４０ページについては後でまた議論する機会がありますので、そのときまでにまた御意見をためておいていただければと思います。

それでは、前回具体的な数字をいただいて、今回クロス集計的なことをやっていただきました。僅か２週間しかなかったにもかかわらず、関係人口の実態把握について、続報として、かなり分析が進んでおります。重要な実態も出てきておりますので、この説明を、やはり国土政策企画官の小田桐さんからお願いいたします。

【小田桐企画官】　　それでは、資料１０ページ以降になりますけれども、関係人口の実態把握の速報値の関係で、４点御報告をさせていただきます。前回と同様、速報値でございますので、今後の検討により数値を見直す場合があることを申し添えさせていただきます。

まず１点目、１１ページ以降になりますけれども、関係人口の訪問系の大分類の見直しということで、１２ページを御覧ください。これまでの分類の中で、テレワークの関係でございますけれども、地域での就労とテレワークについて大きく性質が異なっていると考えられまして、こちらは区分して整理する必要があるというふうに考えまして、現地就労とテレワークを区分いたしまして、就労型（テレワーク）というものを、参加・交流型と趣味・消費型の間に位置づける整理とさせていただければというふうに思っております。めくっていただきまして１３ページ、１４ページ、こちらがそちらを反映した円グラフになっておりまして、３大都市圏の居住者の約８７万人、１．９％というものを入れさせていただいております。また１４ページ、その他地域の居住者につきましては約９２万人、約１．５％という形で数字を入れさせていただいております。これが１点目でございます。

２点目に、１５ページ以降になります。関係人口の訪問先ということで、具体的な数字を１６ページ以降に掲載させていただいております。大きく２か所、東京都と福岡県について先行して数字を整理させていただきました。

まず東京都に居住されている関係人口の訪問系の方の訪問先について、１６ページで整理しております。全体の３６．４％の方が首都圏都市部を関係人口の訪問先として行っておられまして、その他地方部には３１．４％という形になっております。また、この中でも直接寄与型の方の訪問先について申し上げますと、約４割の方が首都圏都市部への関わり、また約５割の方が３大都市圏への関わりという結果が出てきております。こちらの東京都居住の方の詳細な訪問先ということで、どのような性格のエリアに行っていらっしゃるかということについても今回お聞きしておりますけれども、約６割の方が市街地の住宅地のエリア、約２割強の方が市街地の商業集積地、オフィス街等となっておりまして、大体８割の方が農林地を除く市街地という結果が出ております。一方で、２割弱の方が農林地で

すとか農山漁村部を訪問されていると、そういう結果が出ております。

続きまして２点目に、福岡県の状況を先行して整理させていただきました。ブロックの拠点となる都市があるエリアということで、福岡県をサンプルとして先に整理させていただいております。福岡県で申しますと、１８ページのグラフになりますけれども、福岡県内という方が約２４％､福岡県以外の九州地方の方が３６．７％という数字になっております。また、福岡の方で首都圏都市部という方も１２．５％いらっしゃいました。先ほどと同様に、直接寄与型について申し上げますと、約４割の方が福岡県以外の九州地方への関わりとなっております。また、３割の方が福岡県内への関わりとなっているという結果を得ております。

１９ページ目、この福岡県居住の方の関係人口の訪問先について申しますと、全体的な傾向としては先ほどの東京都の例と似ておりまして、やはり全体で約８割近い方が農林地を除く市街地に訪問されていて、約２割の方が農林地や農山漁村部を訪問しているという結果が出てきております。

２０ページが関係人口の訪問先ということで、こちらは関係人口（訪問系）の方約２万６，０００人、訪問地域数に直しますと約５万１，０００地域になりますけれども、これを全国どこに行っているかということを地図上にプロットいたしまして、これは訪問数ではなくて、人口比で、比率で出しております。こうして見ますと、中山間地域あるいは山間地域に、特に関係人口として訪問されている比率が高いエリアが散見されるような状況になっております。こちらは地図にプロットしたものでございます。

以上が２点目でございます。

３点目に、直接寄与型に関する整理ということで、資料の２２ページを御覧ください。こちらは直接寄与型の地域との関わり方ということで、メインの過ごし方とサブの過ごし方という、一番力を入れている取組と、２番目に力を入れている取組ということで今回アンケートをさせていただいております。関係人口（訪問系、直接寄与型）の中で５３．４％の方が、メインの過ごし方が直接寄与型となっております。またその中でも、赤枠で囲っているところでございますけれども、特定の生活行動や用務を行っている方、地縁・血縁先及びそれ以外の施設等を利用、地縁・血縁先を訪問している方、こちらの方々は義務的に直接寄与的な取組を行っている可能性があるが、こういった方々は全体の約１割程度かなということが数字として出てまいりました。

２３ページ目以降、その直接寄与型の方々がどのような関わり方等をされているかとい

うことをまとめております。２３ページの具体的な関わり方につきましては、結論から申しますと、複数回答可ということもございまして、非常に様々な関わり方をされているということで、まちおこし、村おこしにつながるようなプロジェクトの企画・運営、そういったことをされている方もいらっしゃれば、ボランティアの方、あるいは地域の人との交流・コミュニケーションを楽しむ、人脈をつくるという方、また飲食や買物、趣味や地域の環境を楽しむ方、また御自身の用務ですとか生活行動、あるいは墓参、家族・親族の世話と、様々な御回答をいただいているところでございます。

２４ページが直接寄与型の移動時間でございます。中には５時間以上という方も１割程度いらっしゃいましたが、様々あるのかなと、大きく個別の特徴というよりは様々なケースがあるのかなというような結果になっております。

２５ページが滞在期間になります。こちらは約半数の方が日帰りというお答えをいただいております。一方で、残りの４割ぐらいの方は１泊２日程度、あるいは２泊から４泊程度ということで、泊まりがけで行っていらっしゃる方も４割程度いらっしゃると、そういう結果が出てきております。

２６ページ、こちらは訪問頻度になります。最も多い回答は年に数回程度ということで、３大都市圏でもその他の地域でも２０％強という回答をいただいておりますが、中には月に１回程度、月に数回、あるいは月に１０回以上というお答えも、それぞれ約１５％程度いただいているところでございます。

直接寄与型の関わり年数につきまして、２７ページにまとめております。３０年以上というお答えが数としては最も多かったんですけれども、こちらも、１年未満という方も１０％程度ありますし、２番目に多かった５年から１０年未満というお答えの回答以外にも、比較的ばらけているような印象がございます。

最後に４項目めでございます。地縁・血縁的な訪問者に関する整理ということで、２８ページ以降になります。２９ページに、コロナ感染の収束後、関係性をどのようにしていきたいかというアンケート結果を掲載させていただいております。こちら地縁・血縁的な訪問者の約７割の方が真ん中の緑色の部分でございますけれども、７２％というお答えをいただいていまして、地域の人々との関係性について今以上の関係性は求めていないという御回答をいただいているという事実がございます。

３０ページ目になります。関係先と関わりを深めるために必要な要素、ここも地縁・血縁型の方は特徴的な御回答をいただいていまして、上から３項目めになりますけれども、

家族や同行者の理解、価値観の合う仲間の存在という項目が突出しているところでございます。

３１ページ目でございます。居住地における地域活動への参加状況ということで、地縁・血縁的な訪問者の方の参加状況になりますと、３大都市圏の居住者で約８割の方が参加したことはないと、またその他の地域の居住者でも約７割の方が同様に参加したことはないという回答でございまして、傾向といたしましては、関係人口（訪問系）のうちの趣味・消費型と同様の傾向になっているのかなというふうに考えております。

３２ページになりますけれども、以上のデータも踏まえまして、地縁・血縁的な訪問者の取扱いを次のようにしてはどうかというふうに考えております。まず、７割以上の方が今以上の関係性を求めていないと回答されておりまして、また居住地における地域活動への参加状況というものも訪問系の趣味・消費型と類似の傾向を示しているということで、現状ではポテンシャルが低い状況であると考えられるため、引き続き関係人口の予備軍的な位置づけとして整理するのが望ましいのではないかというふうに考えております。以上が４点目でございます。

私からの報告は以上でございます。

【小田切座長】　どうもありがとうございました。少し私からも解説をさせていただくと、あるいは蛇足になる可能性がありますが、先ほど分析というふうに言いましたが、詳細な分析に入る前に、今回やらせていただいたのは、ある種の懸念があると、その懸念についてきちんと確認しようという、つまりこのデータのロバストネスをしっかりと確認すると、そういう作業だったというふうに思います。

まず１つ目は、就労型の中にテレワーク、就労型（テレワーク）という、ちょっと異質なものが入っているのではないか、それが分離できるのかどうかということでチャレンジして、分離でき、それぞれの量を確保できるということが確認された。そういう意味では、分離した上で分析ができるんだということ。それから２点目は、前回の大都市圏を対象とした調査の中で、実は訪問先が意外と大都市圏が多かったという結果が出ておりました。その確認をすると同時に、一方では農山漁村部もある程度の数がいるという、この確認です。言ってみれば訪問先の多様性の確認を２番目にしたということだと思います。それから３番目は、これは実は大きな懸念だったんですが、直接寄与型というのが恐らく関係人口分析のメインターゲットとなると。その際に、義務的に直接寄与という、少し矛盾するような方々がいらっしゃる可能性があるということで調べてみた。ただし、そこは極端に

大きなものではないと、そういう意味で直接寄与というのは、私たちが通常イメージするような直接寄与で構わないことの確認ができたということ。それから４番目には、地縁・血縁的な訪問者に関してはどのように位置づけたらいいのかということで、最後にまとめていただいたように予備軍的な位置づけとして、これも正しく位置づけることができる。このように本格的な詳細な分析に入る前に幾つかの懸念について検討して、いずれも払拭できたという、そんな結論だというふうに私は理解させていただいております。

そのことを前提にして、いかがでしょうか。事実としても面白いことが出ていると思います。いかがでしょうか。

それでは、多田委員、その後、谷口先生、お願いします。

【多田委員】　ちょっとイメージをつかむために質問したいんですが、この首都圏都市部に住んでいる、東京都に居住している人が首都圏都市部に訪問先という場合って、どんなことをされているのかというのを。私があまりイメージつかないので、教えていただきたいと思いまして。

【小田切座長】　これはぜひお願いいたします。

【田中課長補佐】　どんなことをされているかというのは、資料に分類を書いておりますけれども、直接寄与型であれば、まちづくりに参加しているような人とかボランティアに参加しているような人がおりますし、イベント等に参加している人は参加・交流型に分類されていますが、字面にあるとおりの取組を都市部でされているということです。

【多田委員】　それは、例えば千代田区に住んでいる人が渋谷区に行くみたいに、違う地域で、自分の住んでいるところは含まないということになるわけですよね、関係人口だから。

【田中課長補佐】　そのとおりでございます。

【多田委員】　指出さん、こういうので具体的な、こういう例がありますよとか、何か御存じのことはありますか。

【小田切座長】　首都圏の地域内関係人口、ぜひお願いいたします。

【指出委員】　例えばちよだプラットフォームスクウェアみたいなところに行って、地域づくり、まちづくりに参加する方が練馬区から移動しているみたいなことは往々にしてあったりするだろうなと思います。あとは世田谷の尾山台のおやまちプロジェクトのことを、僕はよく挙げますけれども、尾山台には横浜の人たちが地域づくりにやってきたりしているので、そういうこともあるなと思います。なので、僕もこの辺やや曖昧だなと思っ

て見ているんですけれども、首都圏都市部というのが、厳密に言うと、きっと埼玉とかまでなのかなと思うんですが、その中であれば、例えば東武動物公園の駅前のまちづくりに東京の大手の企業の皆さんが関わっているということもあったりするので、こういうことのデータかなというふうに僕は認識しています。

【多田委員】　　ありがとうございました。

【小田切座長】　　指出委員、ありがとうございました。

それでは、谷口委員、お願いいたします。

【谷口委員】　　どうもありがとうございます。非常に迅速な作業で、はっきり言って、ちょっとついていけていない部分もあるんですけれども、興味深い集計がもういろいろ出てきていると思います。

特に２０ページです。関係人口の訪問先ということなんですが、一応１点、念のため確認なんですけれども、白いところはゼロだったという理解でよろしいですよね。

【田中課長補佐】　　そのとおりでございます。

【谷口委員】　　だから、揚げ足取るみたいですけど、青のところが０．０からになっているんですけど、これは人が１人以上は行っていたところということですね。

【田中課長補佐】　　青色に着色された部分は、小数点以下には数字が必ず入っておりますので、１人以上は訪問しております。

【谷口委員】　　やっぱりこれは、行き先が赤になっているところが人口が少ないところですけれども、中山間地域が重点的に赤になっているということとか、北海道を見ると、これは多分ニセコだなとかトマムだなとか、富良野かなとか、大体イメージに合うようなところがかなり出てきているのかなというふうに見えていて、結構これから先も深掘りできそうな感じがするというふうに思っていますということです。

あと、後ろの集計も一応よく分かりましたということなんですけど、解釈の仕方だと思うんですが、２９ページで、これは全体に非常に面白い結果かなと思うんですけど、今以上の関係性を求めていないというのが地縁・血縁的な訪問者が７割もいるという見方をするのか、３割はそうじゃないというふうに見るのか。ほとんどみんな求めていないのかなと思っていた割には、７割止まりだったかなというのが個人的な感想になります。そういう意味でいくと、３０ページの、誰か連れがいると地縁・血縁的な方というのはやっぱり動きやすいということもよく分かったので、そういう意味では１つの流れというのも、逆に見えてきたのかなというふうに感じました。

以上です。

【小田切座長】　　ありがとうございます。特に最後の点の御指摘は重要ですね。地縁・血縁的な訪問者の位置づけということで、谷口先生から前向きな評価をいただきました。ありがとうございます。

ほかにいかがでしょうか。

中島委員、お願いいたします。

【中島委員】　　私からは、２４ページの移動時間のところが非常に興味深いなと思いました。これをどう読み取るかの部分も含めて、ちょっと御意見を皆さんにもいただきたいんですが、私は、思った以上にばらつきがあって、あまり差異がないなという印象があります。距離が関係人口先の地域というものに影響を及ぼすのかどうかというところも、恐らくこれまでも議論されてきていたところだろうなと思うんですが、これを見ると大きな差はないなと感じました。つまるところ距離は関係なく、行きたいところに皆さん行っていらっしゃるということで、そういう見解で合っているのかどうかみたいなところもちょっと気になりましたし、どう読み解くのがよいのかというところ、もしよろしければ御意見なんかもいただけたらうれしいなと思いました。

【小田切座長】　　これは委員で共有して議論してみたいと思いますが、いかがでしょうか。２４ページの、やや大げさに言うとフラットに近いような図が出てきているという、ばらつきが大きい……。谷口先生、お願いいたします。

【谷口委員】　　僕、これは２４ページの図と２５ページの図をセットで見たらいいのかなというふうに個人的には思っていました。２５ページというのが半日、それから丸一日ですよね。日帰り２つ合わせて、大体５０％なんです。それで見ると２４ページは、上からぽんぽん、ぽんぽんと２．０時間未満まで行くと、合計すると大体５０％になるんです。だから２時間ぐらいのところまでだったら、やっぱり帰ってきちゃうよねと、それ以外のところだと１泊２日とか２泊４日とかというふうなことになっているのかなと。これはクロス集計取ったら分かることなんですけれども、そういうふうに類推していけばいいのかなというふうに思っています。

そういうふうな意味でいくと、やっぱり半日や１日とか、日帰り圏で、宿泊費がかからない形で対応されている方の割合が半分ぐらいなので、旅費を問題にされている方が若干どこかでいたと思うんですけれども、そういうふうなところをどう考えるかということで、この資料とはもうちょっと、また変わってくるのかなと思います。

【小田切座長】　　ありがとうございました。

多田委員、お願いいたします。

【多田委員】　　このアンケートで、１人の関係人口の人が１年間のうちに何回そこと関わっているかという、頻度というのは分かるようになっているんでしょうか。

【田中課長補佐】　　２６ページ目を見て下さい、頻度については提示をしております。

【多田委員】　　ああ、年に。これが例えば距離に応じて、距離と頻度の関係というのが見れたらいいなと思いました。

【田中課長補佐】　　それはクロス集計をかければ。また、移動手段もデータとして取得しておりますので、移動時間、移動手段、滞在期間と頻度等をクロスしていけば、どこからどこに訪問しているかについても把握しておりますので、その辺りを分析すれば分かるかなと思います。

【小田切座長】　　指出委員、お願いいたします。

【指出委員】　　昨日お送りいただいてありがとうございました。すごくまたブラッシュアップされて、すばらしいデータだと思っています。

僕もこれは感想なんですが、２７ページの直接寄与型の関わり年数の３０年以上がこれだけ多いというのは、これはどんな関わりをしているのか、より具体的に知りたいなと思いました。というのも、僕が今、自分の中でおそらく最長でお付き合いさせてもらっているのが奈良県の下北山村で、それが多分２８年なんですね。そう考えると、例えば３０代や４０代の人とかは、もうこの３０年以上関わっていると言えるところには該当しないということにも見受けられますので、この人たちはどういうことをやっていて、どんな点から関係人口と呼ばれる中にいる人になるのかというのが知りたいなと思いました。

あと、このすばらしいデータは確実にペルソナを何パターンがつくれるんだろうなと思うので、より一般に、関係人口というのはこういうものだよということを伝え切るためには、もしかしたらそういうキャラクターみたいものを国交省さんのほうで、これに合わせて、かわいらしいマンガ絵みたいな解説をつくられるといいかなというふうには思いました。

【小田切座長】　　最後の御提起ありがとうございます。ぜひそういうこともチャレンジしていただきたいと思います。

田中補佐、お願いいたします。

【田中課長補佐】　　キャラクターをつくって一般化するというのは良いアイデアだと思

います。それに合わせた事例なんかを逆に指出さんらから提供していただいて、セットで見せていくと一般の方々に非常に分かりやすいのではないかなと思いますので、よろしくお願いいたします。

【指出委員】　　はい。今日の発表でぴったりのものをお話ししようと思います。

【小田切座長】　　よろしくお願いいたします。

　嵩委員、お願いいたします。

【嵩委員】　　２３ページの上から４つ目、地域でのボランティアあるいは共助活動への参加というところがやはり、その他地域が１つ抜けているんですよね。というところがあって、それと先ほどの日本地図の２０ページです。それを併せてみると、結構、雪かきとか、そういったものへの参加なのかなと何となく思ったんですが、その辺りは、これをクロスかけると、どの地域にとか、逆にどんな活動をというところまで聞けているんでしょうか。

【田中課長補佐】　　はい。見ていけると思います。

【嵩委員】　　あくまで興味の範囲なので。すみません。

【小田切座長】　　直接寄与型の具体的な関わり方については、これは分析しがいがあるといいましょうか、具体的に何をやっているのか、そういう方々の属性が何なのかとか、これは本当にこれだけでも学位論文が何十本できるような、そんな素材だと思います。よろしくお願いいたします。

　さらに気がついたこと、ほかの省庁の方々も、あるいは国交省事務局の方々も、ぜひいろいろ御指摘ください。お願いいたします。

【藤田課長】　　ちょっと我々のほうから申し上げるのも何ですが。

【小田切座長】　　課長、お願いいたします。

【藤田課長】　　今の御議論の中の観点からいくと、年齢別みたいなものの分析を１つしてみるのはちょっと面白いかなというような感じがいたしました。３０年やっているということは、少なくとも３０歳以上であることは間違いないので、どちらかというと、若い人にもこういう活動が広まっているのか、むしろ高齢の方が中心に活動されているのかみたいなものも、今後のその展開としては大きく関係してくるような気がします。

　あと、ちょっと私が言うのも何なんですけれども、もともと私の理解からいくと、関係人口というものは、どちらかというと東京とか都市部にいる人が、地域の活性化の観点からの関係人口というような話をずっとしてきているという認識なんですけれども、今の分

析からいくと、東京の人が、例えば東京の近場に行く活動とか、逆に福岡県の人が東京に出てきて関係人口と言っているような活動というのを、それも関係人口ではあるんですけれども、地域活性化みたいな観点からいくと、そういう層の人たちをどう捉えていけばいいのかなというのは、ちょっと検討課題かなと思っております。

以上です。

【小田切座長】　田中補佐、お願いいたします。

【田中課長補佐】　課長の発言を補足いたしますと、実は関係人口の関係先として、全国から人が集まってくるところのベストワンはどこかということを分析いたしますと、これは訪問地域数ベースの話でございますが、東京都の新宿区なんですね。次に千代田区とか、そういうところが続くような状況となっておりまして、圧倒的に関係先として出てくるのは都市部、東京とか横浜とか大阪というところが出てくるような状況となっております。それらも関係人口ではあるんですけれども、先ほど課長が申し上げたように、地域づくりの担い手としての関係人口として捉えたときに、そこはどうなのかなということなんですが、実際に都市部で地域づくり活動を行っていると回答している人が直接寄与型の中に結構存在するので、そこら辺の取扱いについても今後整理していきたいと思っております。

【小田切座長】　今の点は、前回のプレ調査といいましょうか、それでも出てきて、いわゆる地域内関係人口、しかも大都市圏の地域内関係人口がいて、その方々が本当に地域づくりに関わっている実態が徐々に明らかになっております。今回サンプル数も多いということもありますので、組替え集計をすることによって、どんな活動をしているのかという、先ほど課長から言っていただいた、これをさらに分析していただきたいと思います。その結果、十分関係人口なんだということが把握できるかというふうに思います。

多田委員、お願いいたします。

【多田委員】　今のお話を聞いて思ったんですけど、就労型で現地就労は地元の企業・事業所での労働と書いていますけど、例えば埼玉県の人で東京都に勤務している人が、関係人口と間違ってというか、そういう解釈で答えたものまで含まれたりしていないかどうかというのはどうなんでしょうか。

【田中課長補佐】　質問の冒頭で、通勤圏とか日常の生活圏の中での関わりは除外するということをしっかりとうたっております。ただ、それをきちんと読まずに回答した人がいるのではと言われると、そこは何とも言えないところではあるんですけれども、基本的

には除かれているというような理解でございます。

【小田切座長】　　そして基本的には直接寄与ということで、多分そこの部分をズームしていくということになると思いますので、若干の混在があったとしても、それを排除できると思います。

谷口先生、お願いいたします。

【谷口委員】　　ちょっと話が戻ってしまうんですけど、先ほどペルソナがどんなタイプがあるかというお話があったんですが、実は去年いただいたデータでその分析を一度やっております。分類したのが１０通りぐらいあるんですけど、二、三、ちょっとキーワードだけ、どんなタイプがあるかという名称だけ言っておきますと、例えば、自己研さん型とかノマドワーク型、それから地域の担い手型、これは主成分の軸なんですけれども、あと単身生活型とかＩＴ親和型です。あとフリーランス型とか、公共の業務に従事するタイプとか、そういう感じで幾つかのタイプ分けというのができています。今年またデータをアップデートしたらまたちょっと違う形になるかも分かりませんけど、ペルソナは出るというふうに思っております。

以上です。

【小田切座長】　　貴重な分析ありがとうございました。ほかにいかがでしょうか。

少し私のほうから、２０ページの日本地図、やはり大いに話題となるような日本地図だと思うんですが、通常この種のタイプのものは西高東低がかなり顕著に現れるという、移住をとってみてもそうなんですが、あるいは地域おこし協力隊などもややその傾向があるんですが、西高東低型があまり強く出ていないですね。これは１つの特徴で、移住については西高東低、しかし関係人口については、その逆というよりも、全国にフラットという、そんなふうに考えることができるのかもしれません。移住と関係人口のギャップが仮にあれば、それはそれで非常に重要な知見だというふうに思いますので、この辺りの分析も将来的には進めていただきたいと思います。

【藤田課長】　　先生、よろしいでしょうか。

【小田切座長】　　はい。お願いいたします。

【藤田課長】　　今のページで、ぜひとも、もし委員の先生方からお話しいただける部分があれば教えていただきたいと思うんですけれども、非常にこれは色がいろいろ違っていて、面白い結果になっていると思うんですけれども、先生方がお持ちの感覚論で、どういうところが赤になっていて、どういうところが青になっているのかという感覚。そういう

のを教えていただけると、どういうところで磨きをかけていけば関係人口が増えていく、青の部分の色が変わっていくのかというところがちょっと興味がありますので、もし何か感覚がありましたら、教えていただけると。

【田中課長補佐】　　その前にフォローさせて頂きます。

【小田切座長】　　では、田中補佐。

【田中課長補佐】　　まず、どのような自治体が着色されているかということですが、名称が載っていないので、地図上では分かりにくいかと思いますので、解説いたしますと、関係人口に係る取組を行っていることで有名な北海道の下川とか上士幌みたいなところも当然赤色になっているんですけれども、あと赤色で着色されているところは温泉別荘地。温泉があるところとか別荘地があるみたいなところと、あと災害復旧をやっているようなところ、例えば東日本大震災の被災地である岩手県の大船渡とか、熊本県の阿蘇みたいなところが着色されておりまして、事実関係としてはそういうことになっているというところでございます。

【小田切座長】　　ありがとうございました。さて、その上で、室長、お願いいたします。

【岡本委員】　　私もこれはちょっと気になっていて、どんなところかというのを地図でずっと、今さっきから見ていたんですけれども、やはり言われているような、いわゆる観光地であるとか、災害なんかのところのほかに、例えば鳥取県でしたら、比較的色がついているのが若桜町、智頭町、智頭町は特に関係人口の取組とかというのが盛んな地域ですね。あと岡山の新庄村と西粟倉村ですか、こちらも非常に関係人口の取組が盛んで、特に温泉地とかというわけではないんだけどというところで、やはり地域として、そういった関係人口の取組に力を入れているところというのは、要するに色が多いという地域のところに挙がっているなということは思いながら見ておりました。特に、同じ鳥取県内でも、鳥取県の西南のところは青になっていたりというところで、ここは以前はそういう取組があったんですけど、今はやや静かになっているかなという思いもあるというようなところでして、やはりその辺りが出てきているのかなと思っております。ただし、こういうところは１人、２人来ると、人口の関係で大きくぶれるところがありますので、そこはちょっと間引いて見る、考えてみないといけないのかなとは思っております。

【小田切座長】　　どうもありがとうございました。前回の分析より抽出率が高いので、少し安定的な分析が着地についてもできるように思います。この点もどうぞよろしくお願いいたします。

それでは、先に進める形でよろしいでしょうか。

非常に重要な結果、先ほど私、冒頭で申し上げましたように、本格的な分析ということではなく、まず頑健性を調べたということですので、これ以降、年齢などを中心とした本格的な活動に関わる分析が出てくるというふうに思います。次回に向けてどうぞよろしくお願いいたします。

それでは、次の議題に入っていきたいと思います。次の議題は、前回から連続しております地域と関係人口のつながりの創出についてであります。前回と同様に、今回も委員から事例紹介を行っていただきたいと思います。本日は嵩委員と指出委員から事例紹介をお願いいたします。各委員１５分という短い時間で大変恐縮ですが、どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、嵩委員からお願いしてよろしいでしょうか。

【嵩委員】　　では、私は資料で、本当に簡潔にお話しさせてください。

関わり、関係人口の中でどういうプロセスを追っていくのかというところが、個人的にずっと気になっていたので考えていたところなんですけれど、やはり「もの」と「こと」、そしてその先は本当は人だろうなと思うんですけれど、人と何をするかというものプラス、時間を共有するというのがすごいテーマになるのかなというところが私の問題意識でした。

前の提出した資料に加えた部分が、関わりのステップをデザインするというところで、様々なアプローチがあって、その中で地域への思いとか関わりの深さが深くなっていくほど色が濃くなっていって、結果として「もの」とか「こと」からのアプローチが、時間の共有というところの「とき」ということになってくると非常に、より深く地域に関わるのかなというようなことを考えていました。

それを前提に、この「つながるしくみ」というところで出させていただく事例が３つほどあります。最近の話ではなくて、もう既に、１０年近く前から続いているものがほとんどですけれど、やはりきっかけづくりとしての「もの」で言うと、まさに関係人口という言葉を使い始めた、一番最初だと思いますけれど、高橋さんが始めた『食べる通信』です。『東北食べる通信』というところがやはり、物から関わりをつくるというところで、これも恐らく、全国に広がっていったのは、共感というところで全国に広がっていったんじゃないかなというふうに思っています。

もう一つ、「こと」というところで言うと、京都移住計画から始まった「〇〇移住」、全国移住計画です。今「〇〇移住計画」という形で、２２地域で始まっているというか、広

がっていますので、やはり共感を育むというところです。自分もこれをやってみたいというのが、上の『食べる通信』と同じように、親しみやすさというところで、自分たちでもできるんだというところで広がったのかなというふうに思います。

あと、「とき」というところです。やはり参加とか貢献していく、そこでしかできないというところで注目したのが、五城目で始まったシェアビレッジの取組です。最近では香川のほうでも同じようなことを始めたという話を聞いていますけれど、ここに関わった人が、もともとクラウドファンディングから始まったというふうに聞いていますけれど、やはりそこから、その後もずっと関わり続けている。この各種イベントは共感という言葉で皆さん参加していますので、こういった取組がどういうふうに場づくりにつながっていくのかというところを整理したのが次のページで、やはり「こと」プラス「とき」とか、それが恐らく実空間だけじゃなくて、東京にいて、遠隔でもできる取組。例えば年会費を払うと村民になれる、これを年貢というふうに言っていますけれど、そういった仕組み。あるいは現地に行かなくても、東京でクラウドファンディングをして村民になった方が集まってやる飲み会が寄合と呼ばれて、そういった場づくりをしているというところ。あるいは現地で年に１回、お祭りを開くんですが、それに呼んで、そこに参加するというのを限定的にやられているということ、こういった実空間プラス遠隔の関わり方というのが非常に面白いなと思っています。

あと、実空間プラス、バーチャルというところで言うと、『食べる通信』がその後、ポケットマルシェという、買手と売手の関係づくりというところから直販につながっていったと。やはりプラスアルファというところ、次の展開が広がっていったというのがあるのかなというふうに思っています。あと、以前から偶然性という話が指出さんのほうから出ていますけれど、やはりそういった場づくりというのが、移住計画のメンバーが年に１回やっている「移住ドラフト会議」、これはもうプロ野球のドラフト会議と同じように、指名をしていく。移住したい人、地域に迎えたいなという人を地域側が指名していく、そういったものをやっていますけれど、やはりこういった偶然性というところがあって、鹿児島のある町に１位指名された方は、結果的に、そこで知り合った山口県の町に移住してしまうとか、そういった偶然性の場が結果につながっているというところが個人的に面白いなと思ったところです。

ただ、やはり最終的に、つなげるためには人づくりというのが必要だと思っていて、これは本当に様々な、世話役であったりとか、あるいは地域のことを翻訳するような翻訳者、

あるいは媒介者というような形かなというふうに思っています。ただ、それにも２種類あるなと思っていて、いわゆる定住者と言われるような、そこに暮らし続ける、そこに住み続けたいという思いを持った人と、いつかいなくなってしまう、いわゆるよそ者、私はずっと「消えゆく媒介者」というふうに呼んでいますけれど、定住はしないけれども関わり続ける人、そういったいわゆるよそ者は、きっかけをつくって、バトンを渡していって、最終的にいなくなることによって自分の役割を全うする。個人的には地域おこし協力隊がまさにこの立場かなというふうに思っていますけれど、やはりこういう関わり方、つながる人づくりというのを地域側から考える必要があるのかなというふうに思っています。

簡単ですが、以上です。

【小田切座長】　どうもありがとうございました。一つ一つ区切って議論したいところですが、まず指出委員、それから事務局からお話をいただいて、全体的な議論に移っていきたいと思います。

それでは、指出委員、お願いいたします。

【指出委員】　お手元の、ちょっとページがいっぱいあるんですが、項目ごとで話をしていきますので、御覧になっていただければと思います。

最初は４枚目の、ちやのきエンデューロです。こちらは関係人口誘引先行型の１つの例ではないかなと思って、持ってきました。人口が年々減っている佐賀の苣木地域の皆さん、３２名くらい今お住まいですけれども、数年ほど前までは六十数名いらっしゃったところですが、そこにマウンテンバイクの愛好家の若い人たちが現れて、その苣木の地区の杉、ヒノキの林を借りることになって、そこで地域の人たちと共にアットホームな国際レースを開くようになったんですね。実は山でマウンテンバイクを走らせると、うちではちょっとお断りだよみたいなつらい仕打ちを受けることが多いんですね。なので、もう本当に真っ白にそこを使わせてもらえる場所を探していたところ、佐賀市役所の職員の筒井竜二さんという方が真ん中に入って、まさに安心の原理で、筒井さんが言うんだったら、そのマウンテンバイクのみんなに貸しても大丈夫だよということで関係性が始まりました。

苣木という場所の国際大会は、福岡のテレビ局がドキュメンタリーにしたりするようになって、苣木という場所の地名がテレビとかラジオで呼ばれるようになったんですね。これが地域の人たちの、自分たちのまちのプライドをまた掘り起こして、みんなが読めない地名だと言っていた場所が、自分たちの苣木が注目の場所として紹介されるようになった、そういう話が出てきました。

ここで僕は弱さの交換が行われたと思っているんですが、どういうことかというと、マウンテンバイクは、みんなからちょっと迷惑がられる遊びだと思われている弱さがあったわけですよね。その一方で、人口が減っていって、当時、今もですが、苣木の集落の方々は、年に数回の区役を、１日でできたことが３日かかるようになっていた。それが実際に悩みの種だったところ、若い人たちがその苣木の皆さんの悩みを受け取って、自分たちから、自らそれをやる、手伝う流れになって、３０名くらいが手伝ってくれるようになったんですね。そうすると、３日かかったものが、１日どころか半日で終わるようになった。こうやってお互いの信頼関係を高めていって、国際大会を開いて、それがまたメディアに載って、苣木という言葉がルビが振られて発信されていく、そうやって自分たちのまちのよさを改めて､外から来た若者に教えてもらいましたよということを､２時間インタビューさせてもらったときに苣木の皆さんからお聞きしたので、この事例を持ってきました。これが、僕は、関係人口というのはお互いに弱さを交換することから始まるのではないかなと思っているひとつの理由です。

それから次が､「梅守志歩さんの、大切な村と宿」というタイトルですが、こちらは関係案内人の話ですね。奈良市内からこちらに移住されて、すてきな「ume,」というお宿を今年の春にグランドオープンさせました。地元の人たちと一緒に、地元の環境とか地元にある食材で最高のもてなしを、誰一人拒まずに、ユニバーサルにやるというこの宿が生まれた結果、地域内に遊びにくる梅守さんと同世代の、２０代、３０代の女性の人たちが現れるようになりました。なので、もともとそこにいる人という視点も大事なんですが、梅守さんという人がまず関係人口的に現れて、その場所に移り住み、宿を経営するようになって、地元の人たちと連携が取れた結果、また新たな関係人口を呼び寄せている。この宿を造ったパートナーの１人に、西粟倉村のようびの大島奈緒子さんという方が設計に入ったりして、そういう地域を超えた関係性みたいなものを大事にしている宿です。

その次のイワシビルというのは、これは関係案内所の例です。１階、２階、３階がそれぞれ違う役回りをしていて、１階がカフェとショップ、２階がイワシの瓶詰め工場で、３階がゲストハウスです。こうやって鹿児島県の阿久根市に生まれたこの施設は、阿久根を素通りさせることなく、ここにストップする人たちを生み出しました。特に３階のゲストハウスができた結果、３，０００円弱で泊まれる阿久根の宿が生まれたことで、鹿児島市内の大学生がここに遊びにくるようになって、この下園正博さんという、まさに地域づくりを自分の仕事として、事業の中から生み出している人、それからそこで働いている、ちょ

っと上の先輩のお姉さんたちとか、そういう人に、これからの自分の進路を考えているような若者たちが、前向きな人生相談をしに来るんですね。仕事をどうしたらいいかとか、地域づくりどうやったらいいかみたいなことを聞きにきています。

その次は、もう有名ですけれども、気仙沼の唐桑半島に社会人１年生で移住した皆さん、ペンターン女子の方々です。こちらも関係案内人のいい例だと思います。関係人口から関係案内人になっていくというのは１つのステップだと思いますが、そこから実際に地域に根差して、ビジネスを生み出していきました。鶴亀食堂と鶴亀の湯という、トレーラーハウスの銭湯と食堂をやり出しているんですね。これも３・１１以降の流れの中で、東京生まれ、東京育ちの女の子たちだったりする人たちがこういうことをやって、９年積み重ねて、地元の人と一緒に新しい文化と人の流れをつくっています。

次は「クスろ」という、女の子たちを中心にした、釧路を面白がる中間組織、団体です。これは一言で言うと、全く違うチャンネルに釧路というブランドを発信できたということが白眉だと僕は思っています。釧路というと、どうしてもオホーツク漁船とか石川啄木とか、割とマッチョで男性的なものがＰＲされがちなんですが、そこに住む１０代や２０代の若い女性の皆さんが、釧路ってこんなにくすっと笑える場所なんだよというので、駄じゃれを介して釧路を発信した結果、全国的に仲間が増えたんですよね。これも１つの方法で、チャンネルを変えれば新しい人たちがやってくるというのを釧路の若い皆さんが見せてくれました。

急ぎましょうね。次は和歌山県の湯浅町の田地区です。ミカンで関係人口をつくっている若い方々です。井上信太郎さんと樫原正都さんという男の子たちが、実家のミカン農家に、大学生たち、東大のみかん愛好会のみんながここに来て、自由にミカンを研究していいと、そういういざないをした結果、援農に若い人たちが来てくれるようになりました。結果的に、これからもしかしたら御家族を持つような若い人たちが、ミカンというものが一体どうやって生まれてきているのか、日本の農業というのはどういう形で行われているのかを楽しみながら学ぶ、農業関係人口が生まれた場所です。今は、ゲストハウスが今年の春に造られて、さらに新しい関係人口の流入が広がっていくんじゃないかと思います。

その次は、先ほど多田さんから御質問いただいた東京・尾山台のおやまちプロジェクトです。こちらも地域内関係人口の１つだと思うんですが、無活動人口のような人たちが地域で面白いことをやっている人たちに出会う確率を上げていった結果、それぞれが自発的に、子ども食堂をつくったりとか、学生たちがいつの間にかパン屋を開いたりとかしてい

るようなプロジェクトに発展していったというものです。なので、まちを面白がる人たちを増やしていく１つの例として、これも関係案内所という感覚ではないでしょうか。プロジェクトそのものが関係案内所になっているということだと思います。

最後は、こちらは公民館の聖地ですね。長野県の飯田市の駅前にある裏山しいちゃんです。これはきっと公民館文化がなせた技だと思うんですが、神社の一角にある古い民家をリノベーションして、１階を駄菓子屋と貸本屋に替えて、高校生たちがそこを切り盛りしています。地元の高校生たちが自発的にそこに関わる場所を、地元の男性、新海健太郎さんがつくって、運営しています。２階は、何かをやりたい人が自由に集まれて、１日数百円で借りられるシェアスペースです。ここに来て、みんな夕方５時以降になると、多種多様な人たちが現れて、お互いに教えたり、教え合ったりするような内発性を担保できる場所をつくりました。これは多分、公民館というものが生み出したものの１つのサブストーリーなのか、あるいは新しいストーリーなんじゃないかと思います。結果的に飯田にはそういった場所が生まれていって、関係人口が集まりやすい流れができました。裏山しいちゃんのほかにも、桜咲造という、高校生が自治するスペースが生まれたりしています。

今日僕がお持ちしたものは、地域と関係人口のつながりの創出を各地で実際に再現性の高い形でやっているプロジェクトであったり、個人であったり、場所を紹介いたしました。

最後、一応まとめてきたんですけれども、地域と関係人口のつながりの創出の視点というのがありますが、まずは「関わりしろ」というものだと思います。これは何度もこちらの委員会でも議論されてきている言葉の中の１つだと思いますが、関わりしろがあることで、実際に偶発性が生まれたりするというふうに思います。あとは、この「弱さの交換」みたいなものを、僕はすごく今意識して見ています。それから最後に、これはＳＤＧｓ的なものだと思うんですが、今、特に関わりにとても価値を求める世代が台頭しました。お金を使うことも関係性の一環であるし、仲間を応援するということも関係性だし、マルシェを開くのも関係性だということがよく見てとれるんですけれども、その根底にあるのは、自分たちが今非常に、ここにいるという、beということですよね。それを感じているんじゃないかなと思います。ですので、これはこの先、ウエルビーイングの議論になっていくんだろうと思うんですけれども、地域や中山間地域や農山村も含め、都市部も含めですけれども、多分そこにいる人たちがbeを感じるようなことがあるかないかで、関係人口の変化、変わっていくんじゃないかなと思います。なので、言葉としてはやや、僕がソトコトに載せる見出しみたいなタイトルにしてしまっているんですが、「おしゃれな生存確認」だ

と思って、ここに一応書いてきました。

僕の発表はこちらで以上になります。ありがとうございます。

【小田切座長】　　ありがとうございます。あるシンポジウムで指出委員が、関係人口とＳＤＧｓというのは親和性が高いというふうにおっしゃっていたんですが、最後の論点はまさにそこですね。ありがとうございました。

それでは、国交省事務局の小田桐企画官からお願いいたします。

【小田桐企画官】　　それでは、事務局説明資料の続きで４１ページ以降、地域と関係人口のつながりの創出（各論）というところで御説明をさせていただきます。

４２ページ目に、関係人口となるきっかけを整理させていただいております。きっかけといたしましては大きく２つ、内部的な要因と外部的要因があるのではないかということで、地域への関心・共感、あるいは自らの意思で訪れたことがあるなどの内部的な要因という場合と、業務ですとか学業で関わったことがあること、あと関係案内人等の紹介といった外部的な要因という、この２つの要因に大別できるのではないかというふうに考えております。今、指出委員からのプレゼンにもありましたけれども、この地域における関わりしろと出会うことができれば、訪問者は地域を継続的に訪問して、地域との関わりを持つ関係人口となっていくのではないかと。また、関係人口の創出に向けては、地域側がその関わりしろを明らかにすることと併せて、地域と関係人口が連携・協働して関わりしろを発見することが重要なのではないかということで提起をさせていただきます。

また、関連するデータとして、４３ページにお示しさせていただいております。関係人口（訪問系、直接寄与型）が地域を訪問したきっかけということで、プッシュ要因ということに着目いたしますと、仕事の関係で訪れたことがあるという割合が比較的高くなっております。プル要因に着目いたしますと、親族、友人、知人が住んでいる、住んでいた、あるいはかつて住んでいた、職場や学校などに通っていたことがあるなど、地縁・血縁が大きな要因となっているケースが確認されます。また、地域行事への参画で訪れたことがあるという方も比較的多く、そういった体験という機会の創出も重要な要素というふうに考えられます。

４４ページ以降、本日御議論いただきたいことを大きく３つ、人と場と仕組みという切り口から整理させていただいております。

以下、順を追って御説明させていただきますと、まず１点目の、人でございます。これまでの議論における整理といたしましては、例えば知名度の低い地域では、関係案内人及

び中間支援組織が地域に人を誘引する、あるいは都市と地方の両方の視点で地域を客観的に見ることが重要、あるいは関係案内人同士のマッチングが必要、さらにその関係案内人等の経済的安定が必要ではないかというふうに御議論いただいてきたかと思います。今後に向けた具体的な論点としてぜひ御意見をいただきたいと思っておりますのが、４つほど例示させていただいております。まず、関係案内人等が創出されるに当たって、必要な支援は何か。２点目に、関係案内人等が活動していく上で必要な環境とは何か。３点目、その信頼性を測る物差しにはどのようなものが考えられるか。４点目、取組を継続していくために必要な支援は何か、この辺りについて御議論いただければと思っております。

２点目、４５ページでございます。必要な場ということで、こちらもまず、これまでの議論における整理ということでまとめさせていただいております。まず、偶発的に出会うためには場が重要となるということで、例えば、そういった場というものは、外部を含めた不特定多数の人が自然と集まり、接触率が高まる場所がよいのではないか。また、興味はあるけれども行動まで至らない人に対して、活動の息づかいのようなものを感じてもらえることが重要ではないかという御意見をいただいております。また、全ての場に求められることという中で、関わりしろを残すですとか、あるいは、そこに行けば会いたい人に会えるという、固着性という言葉が出てきたかと思うんですけれども、その固着性のある場づくりが必要ではないかという御意見をいただいております。

これらを踏まえまして御議論いただきたい論点として、３つ、例示をさせていただいております。まず、過疎地域など、自然に人が集まらない地域、集まる場所を見いだしにくい地域においては、どのように偶発的な出会いを確保すればよいのかというのが１点目。２点目が、自然に人が集まらない地域における場に求められる機能、あるいは在り方とはどのようなものか。さらに３点目、この場が有効に機能し、持続可能となるために必要な取組や支援の在り方、これにどのようなものが考えられるかという点について御議論いただければと思っております。

３点目、仕組みでございます。これまでの議論における整理といたしましては、信頼関係を構築することによってつながりを創出して、お互いに共創したいものをつくり出していける環境、ウィン・ウィンな関係が構築できる関係が重要ではないかということ。また、ＳＮＳ上などに形成されるオンラインコミュニティ、これにつきましては、人が地域に赴くことのハードルを下げることが期待されるのではないかと。一方で、オンラインとオフライン、リアルの相互補完というものも重要ではないかという御意見も出ておりましたけ

れども、こういった観点があるのではないか。また、こちらにつきましても、先ほどと同様、決まった時期や場所でイベントがあるなど、やはり固着性があることが重要ではないかという御意見がありました。また、仕組みそのものが場になり得るのではないか、仕組みが体験等の場面をつくることができるのではないかという御議論もされておりました。

この点を踏まえまして、今回御議論いただきたい具体的な論点、３つ掲げさせていただいております。１点目が、人及び場が最大限生かされるような仕組みとはどのようなものか、２点目が、仕組みの継続性、これを担保するために必要なものは何か、３点目、今後オンライン上で機能する仕組み、これがどのような発展を遂げていくか、こういった点について御議論をいただければというふうに思っております。

私からは以上でございます。

【小田切座長】　　ありがとうございました。今日のこの懇談会のメインテーマでございますので、どうぞよろしくお願いいたします。今、小田桐企画官からいただきましたそれぞれの論点、これを埋めていくと、先ほども議論にあった４０ページのところがさらに充実していくと、そういう仕組みになっているというふうに思いますので、その意味では一つ一つの論点をしっかりと埋めていきたいというふうに思います。

それでは、嵩委員、指出委員の御発表も含めて、質問、あるいは先ほどの事務局サイドからの問いに対しての回答などを、いただければと思います。

まず私から指出委員に、非常に興味深い事例を、いつもながら見事にお知らせいただいたんですが、それぞれの行政との関わり。行政職員が個人として関わったという事例もありましたが、それ以外で典型的な行政の関わり、もしあれば少し御紹介していただきたいんですが、場の整備のお金の出どころとか、そんな細かい点も含めて、もしよろしければ、あればお願いいたします。

【指出委員】　　では、先ほどの資料の中で、ちやのきエンデューロが生まれるもともとの素地の話をさせていただくと、この富士町ですかね、古湯温泉がある富士の佐賀市役所の中で、そちらに勤務をしていた筒井さんという方がキーパーソンでいました。筒井さんは、その項目の中の一番最後のスライドに出ている男性の方なんですが、彼がそもそも、苣木という地域の皆さんと、もっと以前から親しくしている関係性の中で、和綿の栽培をそこでやってみたりとか、大学生がここに来てインターンシップのようなことをやってみたりとかという、苣木の地区を外からの人たちに開かれていくような、そういう取組を幾つか続けていった中で、行政の方と苣木の地区の皆さんとの信頼関係が既に結ばれていた

というのが大きいです。そしてその中で、マウンテンバイク友の会の若い人たちから、たまたま出会ったところで筒井さんが相談を持ちかけられて、苣木の皆さんに相談をしたというのが流れなんですね。

ですので、この取組は、苣木地区の皆さんと、外からやってきた関係人口としてのマウンテンバイク友の会の皆さんとが協働で、ちやのきエンデューロ実行委員会という会をつくって、その上で年に１回、アットホームな国際大会を開いているんですが、常に筒井さんが公私ともに、佐賀市役所の職員として、それからそこの仲間として入っているという関係が、いい形のトライアングルになっているんだなというふうに思いました。ですので、お金的な補助みたいなところで言えば、何かリーフレットみたいなものを作ったりとか過去にはされていたみたいですけれども、もう実行委員会形式にしたので、協賛もそれぞれみんなが取りにいくように、そういったことをアドバイスしているのが行政の職員としての筒井さんの存在です。

【小田切座長】　　かなりきれいに出てきたように思います。ありがとうございました。

どなたからでも。あと１時間ございますので、どうでしょうか。

１項目ずつやっていこうと思いましたが、そうすると議論を狭めてしまいますので、御自由なところからお願いいたします。

それでは、中島委員、その後、多田委員でお願いいたします。

【中島委員】　　嵩委員の資料の最後の、消えゆく媒介者という部分が興味深いなと思っておりました。どう感じたか、ちょっと感想みたいな感じになってしまうんですけれども、やはり漂うというか、漂泊の自由というところが、とどまる人と流れていく人というか、漂う人というところの、まさにその曖昧さというか、定着しないんだけれども、それを認めていきつつ、それが地域にちゃんと役割を果たしてまた次に行くという、ある意味、非常に関係人口って動的なものであるんだなということを、この嵩委員の発表を聞きながら感じたところでした。こうあるべきなんじゃないか、こうであるというふうに、どうしてもこういった会議の中でも定義されていくんですけれども、一番大事なのは、それがさらに時系列で人は動いていくという部分の、２軸、３軸で物を捉えていくというのが関係人口なんだなというふうに感じました。ありがとうございます。

【小田切座長】　　ありがとうございます。動態的側面、ぜひキーワードとして取り扱ってみたいと思います。

【嵩委員】　　補足いいですか。

【小田切座長】　　そうですね。お願いいたします。

【嵩委員】　　消えゆく媒介者というのは、社会学者のフレドリック・ジェイムソンという方が使い始めた言葉なんですけれど、実は私自身が熊本の小国にいたときに、やっぱりいつかいなくなるよと地域にずっと言い続けていて、それがベースにはなっていたんですけれど、それが確信に変わったのが、１０年ぐらい前ですかね、池谷に行ったときに、籾山さんという方が、多田さんが入られる前にいらっしゃって、農業研修生という肩書きで入られていて、彼がたしか２年半というところでいなくなったことによって、地元の方々が、やっぱりこういう人たちが必要だよねということを言い始めたということを聞いて、やっぱりこういういなくなることによって全うする人というのは多分いるんだろうなと。それが結果的に協力隊みたいな、いなくなったことによって、やっぱりこういったことが必要なんだという議論になるというのは少しあるかなというふうに思いました。

【小田切座長】　　田中輝美さんがいうところの風の人ですね。協力隊の年限がある根拠の１つにそのことを言う人も時々おりますよね。大変重要な御指摘ありがとうございます。

それでは、ごめんなさい。今のに関わって、指出委員でしょうか。

【指出委員】　　今の話をしようと思ったので大丈夫です。

【小田切座長】　　じゃあまず指出委員、その後、多田委員、別の件だと思いますので、今の流れで指出委員、お願いいたします。

【指出委員】　　すみません。動的というお話が出たので、僕は今、地域に対して、考え方としてはこれがいいのではないかなと思っているのを共有させてくだい。今日もＮＨＫで、西湖のキャンプ場が盛り上がっているとか、河口湖のキャンプ場が盛り上がっているという話が出ているんですが、そもそもずっと前から連綿と盛り上がっている場所なんですね。ただ、そのときの主体がどんどん変わっていっているだけであって、当時のそこが好きな人が、あるライフステージになったら離れていって、新しい人が入ってきてと。これは僕は、生物学者の福岡伸一先生の唱える動的平衡的な価値観だなと思うんですが、つまり、その場所にやってくる人、出ていく人というのが当たり前のようにある中で、でも平衡としてその場所があり続けるということが大事だったりするので、それこそ誰かが入ってきて、そこにしばらくいる間に、知らないうちに違う方にまたバトンを渡してみたいなことが、関係人口ができることの１つかもしれないなと思ったので、今ちょっとコメントさせていただきました。

【小田切座長】　　ありがとうございました。動的なイメージがさらにくっきりしたと思

います。

それでは、多田委員、お願いいたします。

【多田委員】　この関係案内人などが創出されるために必要な支援は何かというようなことに対する答えというか、１つの意見をさせていただきますと、最後の４８ページの図があると思うんですが、こういう概念がありますよということを、まず地域に住んでいる人が知るということが結構大事でして、そもそも関係案内人という言葉が多分、全然普及していないと思うんですね。関係人口という言葉についてすら、地域おこし協力隊のＯＢで私の知り合いの人とかも、何かよく分からないとか、もやもやしているみたいなことを言っている人がいて、私、こういう委員で出ているので、こういう公表されている資料があるので共有したら、すごい分かりやすいみたいな話です。そういうそもそもの、何というか、ここで話されているようなことの基本的なことを、分かりやすく地域の人にしっかり分かってもらって、地域づくりにうまく関係人口を取り入れることですごくよくなりますよというのを、事例と、こういうステップみたいなのが整理されたものを駆使してというか、そういう概念というか抽象的なものの整理されたものを見せて、ここの部分はこういう事例がありますよとかというのをきちんと当てはめて、こういうふうにやっていったらいいんだなみたいなことをイメージできるような、そういったのをちゃんと情報として普及させるというのが非常に大事ではないかなと思います。

以上でございます。

【小田切座長】　ありがとうございました。関係案内人、関係人口について、まだまだそういった努力が必要だということだと思います。ありがとうございます。

それでは、谷口先生、お願いいたします。

【谷口委員】　谷口です。僕はデータ分析屋さんなので、こういう話は割と素人なんですけれども、印象に残った話をしたほうがいいのかなと思っていて、場づくりに関係あるのかなと思うんですけど、今の多田委員さんのお話にも関連するんですが、あと前回の中島委員さんの八女の話にも関係するんですけれども、過疎地域など、自然に人が集まらない地域はどうするのかということなんですが、私の知り合いに、ローカル線の活性化を軸にエリアの盛り上げを頑張っている人がいて、場所が岐阜県の明知鉄道というところなんですけど、大正のまちづくりをやっているところなんですが、僕個人的に話を聞いていたので、見たいと思って、１人で行ったんですけど、駅前で降りると、一応交通を軸にしたまちづくりなので、ちょうど駅前にそういう場というか、いわゆる直売所みたいなものを

駅とセットでつくっていて、そこに地元のおばちゃんが何人かたまっているような感じなんですけど、周りにあんまり人がいないんですよね、やっぱり。

駅前に出てすぐに、多分そこに集まっているおばちゃんの１人なんですけど、いきなり、知らない人ですよ、よくいらっしゃいましたと言われたんです。そういうことを知らないまちでいきなり人に言われることないので、ちょっとびっくりしちゃったんですけれども、要するに、今、多田委員さんがおっしゃったような、地域住民の方がそういう交通まちづくりのプロジェクトを通じて、関係案内人の先生がいらっしゃるわけですけれども、関係人口だよというふうなことを言わないで、地域住民の方と結局は連携していて、分かりやすい言葉で言えばおもてなしなんだと思うんですけれども、要するに人が少ないところは待っていても駄目なので、来た人に対して地域の方が声をかけようということだったと思うんですよ。

そういう意味では、僕はアリ地獄にはまったようなものかなと思っていて、別に移住しようとは僕は思わなかったんですけど、ただ、こういう機会があると、明知町はこんなのですよと、やっぱり情報発信している関係人口になってしまっているんですよね。だからそういうふうなことを考えると、やはりこの地域住民の方、数が何人かいらっしゃって、そういう場に集まるようなところがあるだけではなくて、そこでうまく人に声をかけましょうと、声をかけてあげないとやっぱり何も始まらないというふうなところがあるので、場プラス、アクションみたいなことですよね。そういうのを関係案内人の方がうまく伝えていただけるようにすると、その関係案内人の方がいなくなった後でも、その地域の中でそういうことが継承されていくのかなというふうに感じています。

すみません。素人話で申し訳ありません。

【小田切座長】　どうもありがとうございます。非常にリアリティーがある議論だと思います。ありがとうございます。

石山委員、何かありますか。もしよろしければお願いいたします。

【石山委員】　４４ページの信頼の物差しについて、前回も発言をさせていただいた部分ではあるんですが、改めてぜひ入れていただきたいというふうに思っている点をお話ししたいと思います。

物差しをどのように考えていくかというところで、やはりこれまでの物差しというのは、基本的に行政のお墨つき、または年齢や活動の年数の実績、そして組織の知名度という、主に３つなのかなと思います。今後、若い世代や、先ほどのソトコトさんのような、関係

案内人のような方々が活躍していくためには、これからの物差しというものは、やはりつながりの実績、そして活動の実績というものが優先的に評価されるような仕組みにするべきではないかなというふうに思います。その手段のツールとして、前回SMOUTさんで御紹介いただいたような、オンライン上でそういった実績が分かるようなもの、またはシェアリングエコノミーのレビューシステム、口コミであったりとか、実際にその人と会った人がその人をどう紹介するかというような、他己紹介ができるようなオンラインのツール、こういったものをどんどん取り入れていくということが考えられるのではないでしょうか。

以上です。

【小田切座長】　ありがとうございました。新しい仕組みの設計図まで御用意いただいたように思います。ありがとうございます。

今の御発言、中島委員、いかがでしょうか。

【中島委員】　ありがとうございます。まさに私たちが今やっているSMOUTの中でのネット関係人口という、SMOUTとか、それ以外のＳＮＳでの活動のデータを集計させていただいて、ランキングのような形でやらせていただいているんですけれども、やはり大事なことは、指標化するということは、ある意味、地域内の共通理解も持つことができます。地域外の方にとっての信頼にもなりますし、地域内の、行政の中では比較的縦割りかなとは思うんですけれども、ほかの部署の方々にも、その指標化されたランキングだったりデータだったりということで、一定の評価を皆でできるようになるという、そこの価値観を共有できるという強みもやはりあるんだろうなというふうに、我々も運営させていただきながら感じているところです。そういった部分を含めて、新しいこういった物差しというのは重要だなというふうに思います。

【小田切座長】　ありがとうございます。ともすれば行政的に認証、認定になってしまうんですが、そうではなく新しい仕組みを動かそうという提起が幾つか出てきております。

多田委員、お願いいたします。

【多田委員】　物差しに関しては、やっぱり地域の中の人から、どれぐらいネットワークを持っているかみたいなところがすごい重要になってくるなと思っていまして、だからこの関係案内人の人が、誰か関係人口の人が来たときに、こういうことをやりたいんですといったときに、じゃあここを使えばできますよみたいな、さっきのモトクロスの事例みたいなことができるかどうかというのが非常に重要ではないかなというのと、あと別の側面として、発信力があって、例えばその人が都会から集客できますよみたいな、そういう

力がある人なんかも１つの指標というか、信頼性というよりか、それは集客力みたいな感じだと思うんですが、それも１つの関係案内人にあったほうがいい能力というか、ものになってくるんじゃないかなと思いますし、あとは行政とのつながりが強い人であれば、より、その行政を伝ってまた大きいことができるので、そういう地域の中の人と、まさに関係案内人だからそういうネットワーク力になるんですが、それが本当の地域住民との関係性と行政の人との関係性と、そういう外の人とのつながり、窓口という、この３つの観点で分けると非常にいいのかなと思いました。

【小田切座長】　どうもありがとうございました。恐らく今までの御経験からの御発言だろうと思います。ありがとうございます。

今、取りあえず４４ページの具体的な論点のところが話題となっております。場についての議論もあって、まだ議論されていないのは４６ページの仕組みなんですが、この辺りで議論があれば。あるいは４４ページの関係案内人をどう育てるのかという議論は直接にはまだないというふうに思いますので、その辺りの穴も含めて。

指出委員、お願いいたします。

【指出委員】　関係を案内できる人は育てていくことが必要です。それは多分、行政の皆さんが地域の中で、地域を魅力的に見つけられたり語れる人たちを育てることが大事なのだと思います。シビックプライドの醸成みたいなことがそれにつながると思うんですが、関係人口が現れるために、同時に恐らく、地域の中で地域を面白く語れるとか、地域の中でコミュニケーションをすごく取れる人たちをどう育てるかということになりますので、関係案内人が創出されるに当たっての必要な支援というのは、地域内にいるそういう人たちのモチベーションをつくるみたいなことも同時にやることだと思います。そうすると逸材がみんな、各地域にいらっしゃるので、そういう方が現れるような仕掛けは同時に用意されるといいと思います。

【小田切座長】　岡本委員、お願いいたします。

【岡本委員】　今の話ですと、例えば、鳥取県もやっていますが、そういった関係人口案内人になる人を掘り起こして、いわゆる行政のページ等で発信するという試み、これは結構あちこちでされていると思いますので、そういったものもあるかと思います。

先ほど行政のキーパーソンの話がありましたけど、地域をよく知るというのと、外に対して開かれた姿勢を持つという、この２つがそろうことで、外との、これも偶然の出会いなんですね。偶然そういう人とつながることでまた広がっていくという動きが起きますし、

あと、ここのところで、過疎地域など自然に人が集まらないところにどうやって連れていくかというときに、やっぱり一番分かりやすいのは、ほかの地域の関係人口案内人から、あそこ面白いよと言われる。関係人口案内人のつながりの中から紹介されるとか、やはりこういう人つながりの紹介というのは結構きっかけになっていく部分があるのではないかなと思っております。

あともう一つ、一番最後の、駅を降りたところでおばちゃんに声をかけられてというのがあったんですけど、関係人口案内人というのは、リーダー的になる人はやっぱり特殊、すごい限られた人で、地域住民のなかで関係人口形成の意識を持った人を育てていくというと、何か。あと、そうして育てられる方が、逆に言ったら一般化するというか、それぞれ皆さんにもやはり一翼を担ってもらうんだよということで、巻き込んで仕組みをどうつくっていくかというのが大事になるかと思います。

【小田切座長】　　嵩委員、お願いいたします。

【嵩委員】　　我々、移住支援をやっていて、今４１道府県の専属相談員がいるんですけれど、やっぱり一人一人が都市側の関係案内人なのかなというふうに思っていて、対外的には我々は地域をつなぐんですよという話をよくしているんですが、最終的にというか、結果的に、人を紹介しているんですね。移住希望者が来た、じゃあ何とか町の何とかさんに会ってくださいと、そういう案内をしているので、我々がいるところがまさに、回帰支援センターの各県の相談員が関係案内人みたいなことをやっているのかなというふうに思っています。

ただ、その人たちが何を求めているか、それに対して適切な人をという、それを知る機会というのが、やはり東京に居続けるとなかなかできないので、地元の人との関わりをどういうふうにつくっていくのか。定期的に出張してもらって、現地でいろんな人に会ってくださいという流れでやっていますけれど、今コロナ禍の中でなかなか現地訪問ができないというところが非常にネックになっている。ただ、オンラインのイベントをやるようになって、常時つながりを持てるようになったというのもありますので、やはりその関係。ただ、会ったことがある人とは継続的なつながりができるんですが、初めましての人、１回オンラインでやったからその後つながり続けるというのは難しいということを聞きましたので、そのきっかけづくりをどういうふうに。やはり都市側の関係案内人も、地域とのつながり、いろんな人とのつながりのきっかけづくりという、都会での場づくり、そういった場に参加するようなことが必要なのかなというふうに思っています。

【小田切座長】　　ありがとうございます。今４４ページに議論が集中しており、ここはかなり埋まったということでよろしいでしょうか。最終的に確認してみたいと思いますが、これは施策上の言葉の確認なんですが、国交省ではつながりサポート機能という言葉を使って、それが先ほどの嵩委員の言葉で言うと、全国的な、ナショナルなつながりサポートと、地域レベルのローカルなつながりサポートがあると。そのつながりサポートのローカルのものの１つが関係案内人、関係案内所という、そんなふうに、そこはそういうふうに結びつけてよろしいでしょうか。施策の理解ということでお聞きしたいと思います。

【田中課長補佐】　　ローカルな部分だけではなくて、全国的なレベルも、やはり関係案内人であったり関係案内所だったりするのではないかなと思っているですけれども、要は４８ページにあるイメージのところなんですが、地域というところもあれば、都市側というところも両方あるのかなという理解です。

【小田切座長】　　いずれにしろ政策用語としてつくった、つながりサポート機能と関係案内所・人という、ここはつながる、重なるということ、これはそれでよろしいでしょうか。

【田中課長補佐】　　はい。

【小田切座長】　　そういうふうに理解を。

谷口先生。

【谷口委員】　　すみません。４６ページの仕組みの議論のほうなので、もしそちらでもよろしければ。

【小田切座長】　　そうですか。それでは、そちらに議論を移していきたいと。よろしいですか。

それでは、４６ページの仕組み、ここはほとんど議論がまだされていませんので、お願いいたします。

【谷口委員】　　ちょっと何点か確認しながらなんですけれども、まず、嵩委員さんの今日のお話、非常に興味深く聞かせていただいたんですが、偶然性の場づくりのところで移住ドラフト会議というのがあって、面白いなと思ったんですけど、これはオンラインではないですよねというのが、まず確認。

【嵩委員】　　そうですね、昨年まではオンラインではやっていない、リアルでやっていました。ちょっと今年どうなるか分からないですけど。

【谷口委員】　　これはオンライン上でやるって、やはり無理がありますよね。どうです

かみたいなというか、要するに双方の信頼関係というのが、こういうことをやる上でどれぐらいのレベルならできるのかなみたいな。ゲーム感覚のところもあると思うので。

【嵩委員】　２日間やって、やはり１日目は飲み会なんですよね。それで……。

【谷口委員】　打ち解けて。

【嵩委員】　やっぱり人となりが出るというところがあったので、それがすごい重要だったんじゃないかなと。

【谷口委員】　お互い分かってということですね。まさにそういうのはソーシャリゼーションで、ネットが苦手な部分だと思うんですけど、そういうところを、だからオンライン上で機能する仕組みを考えるときに、どうクリアしていくかということだと思っているんですよね。

それで、ちょうどこの会議の始まる前に、都市局の方がちょっと来て、別件で相談していたものなんですけど、オンラインで今後、これからどう活用したいかというのを別途、都市局さんが調査をやっているものがあって、その結果が結構興味深いんですけど、いろんな項目があって、要するにネットでの買物みたいなものが今回結構増えたんだけど、そういうのはこれからも継続したいとかというニーズは非常に高いんですよね。この機会に結構そういうのにシフトして、それが戻らないと思うと。一方、オンライン飲み会はもうやりたくないと、みんな結構、そういう回答。あと塾とか習い事とかも、オンラインはもう嫌だという回答が結構出ているんです。

そういうことも考えると、無理にオンラインでソーシャリゼーションをつくるというふうな、オンライン飲み会的なことを頑張ってやるんじゃなくて、むしろ偶然性の場づくりの、この１つ上に書いていただいた『食べる通信』ですよね。何かこういうところからつながりを深掘りしていくみたいな、要するに、もう商業的なものであれば皆さんオンラインに乗ってくるということはある程度分かったので、そっちの中で、何というか、誘導する仕組みと言ったらちょっと言葉が悪いかも分からないんですけれども、地域のことを分かってもらって、それでコミュニケーションを発生させるようなことをやったほうが実質的なソーシャリゼーションの仕組みというのができるんじゃないかなというふうな感触を持っていますというところなんですけど。

【小田切座長】　多田委員、いかがでしょうか。

【多田委員】　今のに回答とかではなくて、４６ページの仕組みづくりの１個の案としてちょっと提案させてもらいたいことがありまして、行政の人向けと地域の人向けと、都

市の住民向け、都市に住んでいるけど関係人口になって地域づくりしたいみたいなモチベーションがある人って意外と結構いるらしいので、そういう人向けに、今回、さっきお話しした概念プラス事例とかをちゃんと時間かけて、年間コースで学べるような、そういったカリキュラムをつくって、そこに参加してもらって、そのカリキュラムの合間にきちんと、自分の地域に置き換えたらこうやってやるといって、要は１回目と２回目の間にちょっと実践してもらって、どうだったみたいな話をするみたいな、そういうものを入れて、たまに現地合宿といって、例えば指出さんとかに、この地域いいですよみたいなところを紹介してもらったら、そこに行って合宿してくるみたいな、そういった一連のことを、例えば年間に、人数制限は当然設けますけど、行政の人１０人、地域の人１０人、都市の人１０人とかで分けてやる項目と、混ざってもらう項目とかをつくって、だんだん卒業生をコミュニティー化していって、そこの中でいろいろつながってもらうというのを長期的に、もう何年かかけて、何期生、何期生みたいな、こういうのをやったらすごいいいのかなと思ったんですけど。

以上です。

【小田切座長】　御提案ありがとうございます。指出委員、いかがでしょうか。多分そういう御提案はいろいろ来ているんじゃないでしょうか、指出さんのところに。

【指出委員】　例えば、福島県の郡山市が今年の９月から始めた「こおりやま街の学校」というのがあって、これは僕が校長先生を務めさせてもらっているんですが、常時１００名くらいの方が受けてくれているんですね。関係人口が増えていくという目的もあるんですが、そもそも郡山市内に住んでいる皆さんが、郡山というまちの魅力をみんなでもっと見つけて、もっと好きになって、もっと発信しようということで、まさにこの関係案内人のベースとなるような考え方で、まちのことを大きく面白く語れる人たちが増えれば、まちの魅力を感じる人たちも外からやって来るので、そういう行政の方からの講座の依頼みたいなものはあります。あと関係人口の講座は、しまコトをはじめとして、ずっと継続でいろいろやらせてもらっているので、今、多田さんがおっしゃられたように、国で、国土交通省さんなのか、どういう形なのか分からないですが、関係案内人をつくるという学校はあってもいいのかなというふうには思いましたね。コミュニティーマネジャーとかコミュニティーマネジメントにも近いものだと思うので、その辺をどう線を引くのかとは思いますが、多田さんの御提案は、僕はとても面白いなと思います。

【小田切座長】　中島委員、お願いいたします。

【中島委員】　　私も、この仕組みがどのような発展を遂げていくかというところのアイデアというか、我々が考えていることの中の１つをお話ししたいと思います。オンラインであったりインターネットが非常に得意としていることというのは、やはりカテゴライズだと思います。オフラインにはできなくてオンラインにできることというのが、そのカテゴライズだったり、それを横断的に関わり合えるというようなことなのではないかなと思います。例えばですけれども、最近サウナとかがすごくはやっていますが、いろんな地域でのサウナというものを、サウナ好きの人たちがサウナというカテゴリーでいろんな地域に関わり合うとか、私は食べるカキが大好きなんですけど、カキって日本全国にあると思いますが、いろんなカキをつくっている方々に会いに行くであったりとか、そういった、普通オフラインだと、一人一人に、１回１回お会いするのもそうですし、その情報を取るのはなかなか難しいと思うんですけれども、それを一人一人の趣味嗜好とか暮らしの選択であったりに合わせて、横串で取っていく、それをオンラインを使って接点を持っていくみたいなことは非常に得意としているのではないかなと。その後、いざ行こうというふうになれば、非常に情報の量と質が高まって、インターネットをリッチに使えるんじゃないかなというふうに思っています。

【小田切座長】　　それでは、岡本委員、お願いいたします。

【岡本委員】　　先ほどの谷口委員、中島委員のお話に関連してなんですけれども、ふだんから会える人とのやりとりがオンラインになったのは、やっぱりリアルが戻ったら、もうやりたくないということだと思うんですよ。その代わり、オンラインの強さというと、まさに今言われるように、ネット上でなければ見つけられないものに出会うこと。もう一つは、距離があって、ふだんだったら会えない人とかにつながるという点では、やはりオンラインの強みというのはあるんじゃないかなと思っていまして、あと一つは、あくまで、やっぱりオンラインだけでは完結しないだろうと。オンラインとオフラインの行き来ということになるのではないかと思っていまして、そういう意味で、オンラインはオンラインの強みというところで、そういった部分を上手に使っていくということで、特にいわゆる自然に人が集まらない地域というのは、多分距離的にもなかなか行くのが難しい地域というのがありますから、そういう地域とか何かとどうやってつなげていくかというところには、やはりオンラインというものの役割があるかと思います。

【小田切座長】　　じゃあ、まず嵩委員、その後、石山委員、お願いいたします。

【嵩委員】　　今の話をずっと聞いていて、特に中島委員が言われていたリコメンド的な

ものですよね。多分アマゾンとかで、この商品を買った人はこんなものも買っていますというお薦めをされて、それがすごい偶然の出会いかなというふうに。あれで結構、ついいろんなものを買ってしまってはいるんですけれど、やはり知らないものと出会うというのがオンラインの得意としている部分だろうなと思っていて、ただ、その情報を集めるというのが非常に難しいんですね。

回帰支援センターと凸版印刷で移住先のマッチング、画像を選んでいくことによってマッチングするというシステムをつくり上げるときも、やはり自治体からもらえる情報の偏りというところで非常に苦労していまして、お薦めするにしても、本人が欲しいものが分かっている場合はお薦めしやすいんですけれど、本人が何を欲しがっているか分からない場合にお薦めしにくいという、これが非常に難しいなと。本人が具体的に何かやりたいことがはっきりしていれば、じゃあこういう人に会ったらいいよと言えますけれど、そうではなくて漠然と、センターにもたまに来るんですね、何か面白いことをやっているところを教えてくださいという。いや、面白いことって何ですかという話になっちゃうので、そういう欲しいものがはっきりさせるというのをどうやってやるんだろうなというのが、オンラインではなかなかできないところかなというふうに思っています。

【小田切座長】　ありがとうございます。それでは、石山委員、お願いいたします。

【石山委員】　仕組みの部分で、エコノミーといいますか、サービスを消費するというところの中の層というのがすごく伸び代があると思っていまして、その中に人を入れていくというところですね。例えばシェアリングエコノミーなんかもそうですけれども、ホテルに宿泊をするという消費ではなく、AirBnBで現地のホストの人の家に泊まるとか、旅行会社のツアーではなくて、C to Cの観光ガイドの、地域の人がマンホールツアーをするみたいなものに１万円を払うとか、そういったエコノミーの中に人を入れていくことで、今Go To キャンペーンがありますけれども、旅行に行く、観光に行く、そこにお金を使いたい、そういう人たちをもっと取り込んでいくことができるのかなというふうに思いました。

以上です。

【小田切座長】　別の切り口での整理をしていただきました。ありがとうございます。

さて、全般的な議論になってきました。今日の新しい議論として関係案内人の人材育成的な視点が重要だということも出てきました。あるいは、これは前々から議論しているオンライン、オフラインのそれぞれのメリットをうまく使っていくという相互乗り入れ的な場面が必ず必要なんだと、これも改めて確認されたと思います。ほかにいかがでしょうか。

２番目の場をめぐっては、場には人が必要なんだという議論がありましたが、場自体については少し議論が不足しているように思いますが、この場について。要するに、この場は何でも場になれるということが１つのポイントなんだと思いますけど、それだけでよろしいでしょうか。もうちょっと突っ込んだほうがよろしいですかね。

じゃあ、嵩委員、お願いします。

【嵩委員】　　結構もう本当に多様な主体が関わるような地域を見てみると、やっぱり具体的な場というか、拠点があるんですよね。それを運営している人もそうなんですけれど、その人に会いに行くという、その人が変わらないというのが少しポイントかなというふうには思っていて、そこに行けばその人に会えるという、そういった場は重要だなと思っているのが１つと、あと共通しているのが、そこは結構自由な場所だよというふうに地元の方からも認識されているんですよね。自由な場というか、いわゆる非武装中立地域みたいな、自分の集落まで入ってこないから、まあ、あそこだったら自由にやっていいよというような見られ方です。廃校活用であったりとか、地域の拠点ではあるんだけれど、結構自由に、あそこはああいった場だからというふうに地元から認識されている。私が話した今回の取組事例はまさにそうですけれど、あそこはいつもよそ者が来る場所だからねというような認識をされているというのが、あそこだったら別に地元の人が遊びに行ってもいいし、よその人がいるからそこに行くという形が取れるので、そういうＤＭＺみたいな、そういう場って議論できないのかなというふうには思っています。

【小田切座長】　　今の議論は大変興味深い議論。多田委員、いかがでしょうか。

【多田委員】　　偶発的な出会いの部分で、さっき、アマゾンで買ったらこういうのがリコメンドされるというのがあるという意見がありましたけど、やっぱりオンライン、過疎地域ほどそういうオンラインをちゃんと使えば、偶然で来るなと思っていまして、というのは、私どもも、ふるさと納税で棚田オーナーというのを出品しているんですけど、そのふるさと納税経由で棚田オーナーになった人が、この前、稲刈りのイベントに来て、よかったということで、早速また来年も更新して、いろいろな知り合いにも広めますよみたいなことを言ってくれたりもしたので、その場合、我々は別にもう何のつてもないけど、ふるさと納税というのに出品していたという、ただそれだけで来たので、広告を見てもしかしたら来ただけかもしれないですしというのがあるので、やっぱり自然に人が集まらない地域ほどオンラインをちゃんと使うというのは非常に大事かなと思っていまして、ユーチューブも私やっていますけど、それも結構意外と、そこで初めて知ってお米を買ってくだ

さったとか、そういうのもありますので、まさにオンラインにちゃんと、偶発的に来るように仕向けるというのが大事であるなと思いました。

ただオンラインの場合、出したらすぐに広まるかといったら、出しても全然再生されないとか、そういうのもありますので、その辺はきちんとマーケティングとかをしないといけないかもしれませんが、ただ、ふるさと納税とかに出す場合、ふるさと納税側がある程度宣伝していますから、そういう宣伝しているところに出すというのは結構大事かなと思いまして、なので、さっきの、移住者が欲しかったら、自分の地域の移住計画とかにきちんと参加するとか、そういう、それ専門で発信している媒体で、ちゃんと積極的に載せていくというのがすごい大事になるんじゃないかなと思いました。

【小田切座長】　　それでは、指出委員、岡本委員の順番で。

【指出委員】　　ありがとうございます。場という点で言うと、最近特に各地域の若い皆さんにお会いすると、本業と副業の名刺を僕に渡してくださるんですが、本業は、例えば第１次産業に従事しているんですが、もう一つは編集者と書いている人が結構増えてきたんですよね。場を編集するということが実は少しずつ地域で受容されていって、例えば藤本遼さんという人とか、おきなまさひとさんという方とか、検索すると出てくる、ローカルの中では有名な方ですけど、場を編集するという人がその地域にいることはとても重要だなと思います。

これは関係案内人とはまた別でいいと思うんですね。その場所が常にいろいろな人や、それからしっかりと地域の人たちのことも慮って、空気が読めるような、まさに編集者的な視点でその場所がつくれる人たちが生まれ育っているのが今だと思っていて、しかもみんなそれを編集という言葉で、自分の仕事は編集、自分の好きなことは編集なんですよということをやっている方が増えているなというふうに見受けられていますので、言葉としてどう表現するか難しいんですけれども、そういう場づくりという言葉でいいのか、場を編む人なのか、そういうことができる人がいることは大事だなと思います。

【小田切座長】　　そうすると、その場の編集というのは、従来のコーディネートとは少し違うニュアンスなんですか。

【指出委員】　　そうですね。コーディネートをして、そのコーディネートをした結果、何かが生まれるということ、それこそ偶然の何かが生まれることまでをちゃんと見れるということでしょうかね。なので、コーディネートというのはきっと、その場所がうまくいくことがとても大事なんですけれども、その先も面白くなることというか、その先をつく

れる人が多分編集の視点で大事なところなので、コーディネーターというか、多分、プレースメーカーなのかな、そういう感じですね。プレースエディターでもいいんですけれども、そういうものかなと思います。

【小田切座長】　　必ずしも関係案内人とは一致しないというお話もありましたが、人材育成の一種のターゲットとして、そういったものが何か見えてきたような気がしますね。ありがとうございます。

それでは、岡本委員、お願いいたします。

【岡本委員】　　編集者という言葉がありましたけれども、いわゆる地域の魅力を見つけて、編集者ということは、誰に伝えるかということにおいて、その相手方の価値観を知っているということがあっての編集者ということだと思うんですけれども、あと１つはさっきの行政側の役割なんですけど、逆に言ったら、人が集まらない地域の行政マンって、地域で活動する人を知っているんですよね。人は知っているから、そこに、オンラインであるとか、外の手法を知っている人材とか何かをどうやってつなげていくかという仕組み、それをどうやって場に出すか。例えば過疎地とかの、これはちょっと今具体例が浮かばないですけど、逆にそういう似たような地域ばかりで集まって、そういうのを売り出してみた例とかというのが過去にもあったと思うんですけれども、そういった手法を伝えること、場に出すことということがまた必要になってくるんじゃないかなと考えております。

以上です。

【小田切座長】　　ありがとうございました。それでは、谷口委員、お願いいたします。

【谷口委員】　　非常に刺激的な、面白い議論だなと思ってお聞きしていたんですが、僕はこの偶発的という言葉が、うーんとしばらく思っていたんですけれども、場は偶発的なんだけれども、ここで出会う人はそれを必然と思わないといけないんだと思うんですね。ここで出会ったことが運命だというふうに思うように編集しないといけないということだと思っていて、これは都市計画の中で、別の分野で言われていることは、都市のデザインでいいものは、どんな偶然に見えるようなものでも、それはちゃんと計画されてデザインされたものだということが言われているんですよね。そういう意味ではやっぱり、指出さんがおっしゃった編集者というのは、僕はデザイナーだと思っていて、場のデザイナーとして、偶発を装いながら必然をつくるというか、そういうパワーというのが求められるのかなと思いました。すみません、コメントです。

【小田切座長】　　多田委員、お願いいたします。

【多田委員】　今のお話を聞くと、私がまさに池谷に行って山本さんと出会ったのが偶然なんですけど、すごい必然だなというふうに思って、これもまた思い出してみると、JENという外の団体ですね。外の団体が１つのチャネルとして引き込んでくれたみたいなのがありますので、これってある意味オフラインだけど、ふるさと納税みたいなもので、要するに、いかに過疎地は外の、この４８ページで言うと都市側の関係案内人に相当する人とつながるかというのがすごい大事になるのかなと思いました。

【小田切座長】　ありがとうございました。今の一連の議論で、場のところはかなり埋まってきたような気がします。議論する前までの場というのは、それは人ではないかという、そんなニュアンスがあったんですが、そうではなく、明確な編集者やデザイナーによって計画された場、初めてここで場の意味が見えてきたような気がします。

さて、それでは、もう少し時間がありますので、どうでしょうか。国交省サイド、事務局から、これが聞きたいとか、今までの議論の中でこれが不足しているなんていうのがありましたら、ぜひ遠慮なくお聞きいただければと。

【田中課長補佐】　計画された偶発性ということで、人が集まるようなところ、人が通るようなところ、交通を軸としたところに場を設けていくみたいなことはこれまでも議論されてきたのかなと思っているんですけれども、私が今の議論を聞いていて、もう少し皆さんの御知見をいただきたいなと思うのは、人がいないところというのがやはりあるんですね、自然に人が集まってこないところ、人が通らないところです。いわゆる過疎地域なんかがそうだと思うんですけれども、先ほど谷口先生の事例で御紹介いただいた明知の例なんかも、そこには気動車が通っていて、駅があるということで、人が一応通る要素はあるわけなんですけれども、本当の田舎の過疎のほうに行くと、そもそもバスもなかったり公共交通機関がなかったり、そういうところで関係人口を求めているところというのもあるんじゃないかなと思っていまして、そういう地域と都市側の人が出会う偶発性というのはどうやってつくったらいいのかなというところを、もう少しヒントをいただければありがたいなと思うんですけれども。

【小田切座長】　これは多田委員、お願いいたします。

【多田委員】　それがさっき言った、都市側の関係案内人と地域がつながるということが必要になるんじゃないかということなんですね。

【田中課長補佐】　当然それも理解していて、オンラインというのも１つのヒントとしていただいたんですけれども、もう少し違う観点でないかなというところなんですけれど

も。

【小田切座長】　　ほかのケースがないかという、そういう意味合いですね。

【多田委員】　　そこは、偶然というのは結構、宿泊とかの施設があるかないかというところになってくると思いますね。私が住んでいるところも、はっきり言って、目的がないと来ないところですから。どん詰まりなので。

【小田切座長】　　それでは、指出委員、お願いいたします。

【指出委員】　　昨日、僕は夕方６時から「ソトコト編集長の東北学」という、赤坂憲雄先生に最大の敬意を払って、そういうタイトルをつけたんですが、それは多分１，８００人くらいに見てもらったんですね。これは、僕の中では、東北は好きなんだけれども、東北のさらにその先の地名が分からないというフェーズの人たちが大勢見てくれたんだと思うんです。なので多分、その人が集まらない場所とか現れない場所は、もうちょっと大きい分母の中から人を呼び込む仕掛けをオンラインやオフラインでやることが大事なんじゃないかなと思います。東北という言葉の先に、例えば羽後があるとか湯沢があるとか、それこそ男鹿半島があるみたいな形にしていくことで、自分ではリーチできない人たちに伴走できる形でその場所を案内できる仕組みができるんじゃないかなというふうには感じました。

【小田切座長】　　今の論点は多分、国交省事務局、共有化されている論点だと思いますが、さらに指出委員などにお尋ねしたい方いらっしゃいますでしょうか。

局長、お願いいたします。

【中原局長】　　今日の大変充実した議論を聞いていて、先ほどの関係案内人のところと、場のところでもそうなんですけど、やっぱり人が大事というか、人を育てていって、そういう、きちんと人を呼び込めたり紹介したり、いろいろな偶然を必然にできていく人をいかにたくさん増やしていくことで、こういった機会が増えていくということを強く感じたんですけれども、先ほど多田委員からも、カリキュラムみたいなものをつくって、そういった分からないことや何かをちゃんと学ぶ人を自動的にどんどん増やしていく仕組みというのは、私も大変重要ではないかと思って聞いていたんですけれども、それは行政のできることの１つでもありますし、あと、私は内閣府にもいたんですけど、内閣府でもそういったＥラーニングみたいな、まちづくりとかそういった地方創生のことを学びたい、いろいろなメニューをＥラーニングでも用意しているページや何か、かなり充実したものも持っているので、そういうところでも政府の中で連携して、そういうカリキュラムをつくっ

て載せていくというのも大事だと思うんですけど、そういったノウハウは多分、今ここに集まっている先生方の頭の中にはすごく、それぞれたくさんあるですけれども、そういうのをそうやって集大成していく仕組みというか、プロセスが必要かなと思うんですけれども、それについて何かアドバイスをいただけるとありがたいなと思います。

【小田切座長】　　極めて重要な問題提起をいただきました。

多田委員、お願いいたします。

【多田委員】　　一応、私、実はそういう会社向けの研修講師とかをやっている会社にいたことがあるのと、今ちょっと、そういう研修講師の人たちが集まるコミュニティーに入っていて、そこで認定とかも持っていたりするんですが、そういうカリキュラムをちゃんと体系的につくって、Ｅラーニングとかって自分のペースで学ぶんですけど、個々が学ぶだけではなくて、実践ときちんとつなぎ合わせて、コミュニティー、プラス学ぶというのをペースメーク的にやるような、そういう仕掛けでやるのがすごくいいんじゃないかと思っていまして、その上で現地合宿も時折入れると、例えばそれは行政の人と都市住民の人が出会うとか、そういうふうに、そのカリキュラムの中にコミュニティーづくりもちゃんと組み込むと、私は、それが何年かたったらすごいいいあれになると思いますし、例えば過疎地域でそういう人を呼び込みたいとなったら、まずこの研修というかカリキュラムに参加して糸口をつかむと。そうしたら知識も得られて、リアルなつながりもつくれるみたいな。あとは、同じ人、要は自分が、例えば地域の人であれば、地域の人用のコミュニティーもつくっておいて、全員がつながるコミュニティーと属性ごとのコミュニティーを分けておいて、同じ立場の人は同じ立場の人と相談できるみたいな、ここに今ちょっと図を描いたんですけど、今度もしあれだったら次回、ちゃんと整理したものをお持ちしようかと思いますが、こういうのをきちんとうまくつくれればすごくいいのかなと思ったんですね。

なので、オンラインで講座があっても、結局その講座がいっぱいあると埋もれてしまいますから、その人には、この回までにこれとこれとこれを見てきておいてくださいと。今度、見た後に集まった場で、それを見てどう思ったかとか、自分の地域に置き換えるとどうだったかとかというのをちゃんと意見交換して、要するにインプットとアウトプットを両方やらないと学びは深くなりません。なので、勉強して終わりだと結局片手落ちで、忘れちゃいますから、ちゃんとそこで議論をするとか、自分で実践してみたらこうだったみたいなことを発表するとか意見交換するというのをきちんとカリキュラムに組み込むとい

うのがすごい重要であるなと思います。

【小田切座長】　　はい、お願いいたします。

【中原局長】　　よく分かりました。それと、やはりオンラインだけではなくて、Ｅラーニングとちょっと申し上げたのは、取っかかりとしてやりやすいからなんですけど、多分リアルとのバランスがやはり大事だと思いますし、行政のほうの人が、地域でもそうですけど、熱心にやりがいを持って、それにのめり込んでやってくれるかどうかというのは、やはりパッションがないといけないと思っています。それはやっぱりそういうリアルでの何かがきっかけで、その人がパッションを持ち始めると、すごくどんどん熱心になってくるというので、それはどういう立場の人でもそれが必要なんでしょうけど、それが教えられるようなカリキュラムというか、それを持ち得るような、仕向けるのが多分すごく大事なのかなと思って、聞いていました。

【小田切座長】　　谷口先生、お願いいたします。

【谷口委員】　　関連して、参考になるかどうかと思うんですけど、国交省さんだと、小平に地方の職員の方の研修センターがございますよね。僕は交通まちづくりとコンパクトシティーと２つ担当させていただいていて、３泊４日ぐらいで地方の方が来られて、役所の方も、あとそれから実務の方も順番で講義を持って、実習とか手を動かすワークもありますので､そういうののカリキュラムでも何かあってもいいような感じかなと思いました。すみません、コメントです。

【小田切座長】　　嵩委員、お願いいたします。

【嵩委員】　　もう２０年も前の話ですけれど、私が小国にいたときに、小国町で私がいた学びやの里というところで、ラーニングバケーションというキーワードを使っていたんですね。いわゆるツーリズム大学という市民大学をやっていたので、月に１回、２泊３日で研修をやっていて、それが地域内の方も含め、九州内と、あと東京とか首都圏からも参加されていて、その２泊３日で同じ時間を共有するというのがやはり対等な関係づくりにつながったなと思っていて、地元の方は、自分たちが当たり前で持っていたものが、よそから来た人にとってはすごい新鮮だというのに気づかされたというのもありますし、逆にそういった場が、まさにそれが場だったと思うんですね。その場があったおかげで、移住したい人がそこに行けば地元の人と知り合えるみたいなのがあって、結果的に、そこに参加した人が、やはり年に１人ぐらいは移住されていたんです。なので、そういう地方に学びに行く場づくりというのは、実はそこの地域資源を積極的に使えるということができる

んじゃないかなというふうに、今の話を聞いて思いました。

あともう１個思い出したのが、指出さんが編集の話をされたんですけれど、実は当時、フリーペーパーを作っていたんです。Ｕターン、Ｉターンしてきた若い人だけで作っていたんですけれど、その編集というか、編集会議というのを毎月やっていて、やっぱりそこが場だったんですよね。次のネタは何にしようかというのもありますし、あそこは知らないのとか、こんな人がいるよみたいな、そういった場にどんどん、どんどん新しい人が参加してきたんですね。高校に話をしに行ったら、高校生も参加したいと来ましたし、じゃあ高校生に何か取材させようというときに、中学生を取材してきてくれといったら、また中学生が自分たちもやりたいと言ってきたという、やはりそういった次につながる、バトンを渡していく、それが結果的に人材育成につながったのかなというふうに個人的に思っていますので、まさにそういった実践。フリーペーパー作りというのは非常に分かりやすかったなというのを、今思い出しました。

【小田切座長】　　ありがとうございました。

そろそろ時間になってきました。今、局長からいただきました人材育成の面、今日も明確にテーマとして出てきました。１つのキーワードは恐らく、人材育成のためには、何のために、誰のためにというターゲティングが重要であると同時に、そういうターゲティングされた人々をミックスするような場をつくるというのが共通項として出てきたように思います。ここは新しい論点として、ぜひテークノートしていただきたいと思います。

それから、田中補佐から出た内外の人の出会いの場をどのように増やしていくのかという、もちろんその重要な役割がオンラインであるわけなんですが、オンライン以外に手法はないのかということについては、まだ私たちのほうから回答が出ておりません。これは次回にもう一度議論できるような機会はありますか。

【田中課長補佐】　　はい。

【小田切座長】　　我々の次回までの宿題とさせていただくということで、いかがでしょうか。

それでは、一応時間ですが、あと若干ありますので、最後にどうしてもという方がいらっしゃいましたら。

じゃあ、佐藤補佐、１分間ぐらいでお話ししていただけるのであれば。

【農林水産省】　　さっき田中補佐が言った、自然に人が集まらない地域にどうやって呼び込むかという点は非常に大事だなと思っていて、この辺をもっと議論できたらいいかな

と思っていたんですけど、御意見を聞きたかったのは、これと物差しとの関係性です。恐らくですけど、本当にトップランナーになっているような地域は、多分物差しとかは必要としていなくて、もう勝手に人が来ていると。この議論をしていったときに、物差しを誰が求めるかなと考えたんですけど、多分トップランナーと言われているような地域ではなくて、これから何とかして模索していこうというような人たちだと。そういうときに、仮にこの物差しが､例えば食べログとかを見て４．０以上のレストランに行くぞみたいな人にとっての物差しだと、本当に物差しを求めている人たちにとって有効じゃないかもしれないなと、そういうリスクもあるなと思ったんです。なので、これから頑張って関係人口を増やしていこうという人たちが段階的に頑張りやすくなるための物差しとは何なんだろうということを、御意見あれば聞きたかったなと思っていた次第です。

【小田切座長】　　ありがとうございます。我々のいただいた宿題の１つのポイントだと思いますので、それを踏まえて、次回に議論の場を再度いただいたということでいかがでしょうか。よろしいでしょうか。――はい。

それでは、ちょうど時間となりましたので、進行を事務局にお返ししたいと思います。

【田中課長補佐】　　ありがとうございました。次回につきましては、令和３年１月１９日に開催したいと思います。本日御意見いただきました人材育成等につきましては、農林水産省のほうでも地域づくりのプランナーに係る人材育成等を検討しておりますので、そちらとも連携協働しながら議論を進めていきたいと思っております。本日各委員の先生からいただいた意見等につきましては、座長と相談の上、事務局で整理させていただきまして、皆様と共有させていただきます。

事務局からは以上でございます。

これをもちまして、第４回ライフスタイルの多様化と関係人口に関する懇談会を終了いたします。本日は、どうもお忙しいところありがとうございました。

―― 了 ――